



くものいと

Kumo-no-ito

No. 56

関西クモ研究会

March 2023

くものいと No. 56

March 2023

目次

鞆公園（大阪府大阪市）で採集されたハエトリグモ科の2種	
	桂孝次郎・加村隆英 …… 1
2017～2020年に広島県で採集したザトウムシ目（クモガタ綱）	
	辻雄介・辻春香 …… 3
2015～2021年に愛媛県内で採集されたザトウムシ目	辻雄介 …… 5
ショウジコモリグモについて	荘司康治郎 …… 7
コムラウラシマグモの交接の観察	加村隆英 …… 12
大阪府茨木市泉原のクモ，トゲグモほか	西川喜朗 …… 17
京都府におけるイソタナグモの採集記録	加村隆英 …… 19
京都土産	新海明 …… 20
日本蜘蛛学会第54回大会エクスカーション採集報告	加藤修朗 …… 34
関西クモ研究会2022年度採集会の記録	…… 40
関西クモ研究会2022年度例会の記録	…… 43
関西クモ研究会2021年度会計報告	…… 45
関西クモ研究会会則	…… 46
会費納入のお願い・編集後記	…… 47

鞆公園（大阪府大阪市）で採集されたハエトリグモ科の2種

桂 孝次郎・加村 隆英

筆者の一人，桂は長年にわたって，大阪府大阪市西区の鞆公園で生物調査を続けており，クモ類については，今までに未同定種を含めて 84 種を記録している（桂・奥野 2022）．最近，本公園では初めての記録となるハエトリグモ科の2種が採集されたので報告する．

タカノハエトリ *Heliophanus lineiventris* Simon 1868 （図 1）

1♂，大阪府大阪市西区鞆公園，2022 年 10 月 1 日，桂孝次郎採集．

鞆公園東園のほぼ中央部，ヒマラヤスギが 2022 年 1 月 17 日に伐採され，上空がオープンになって出来た草地（イネ科植物が多いところ）のスウィーピングにて採集．標本は加村が保管．

本種はヨーロッパから極東まで，広い分布域を示す（World Spider Catalog 2023）．新海ら（2022）によると，国内では東北地方から九州まで各地で記録があるものの，関西地方での明瞭な記録はなく，今回が大阪府初記録となる．

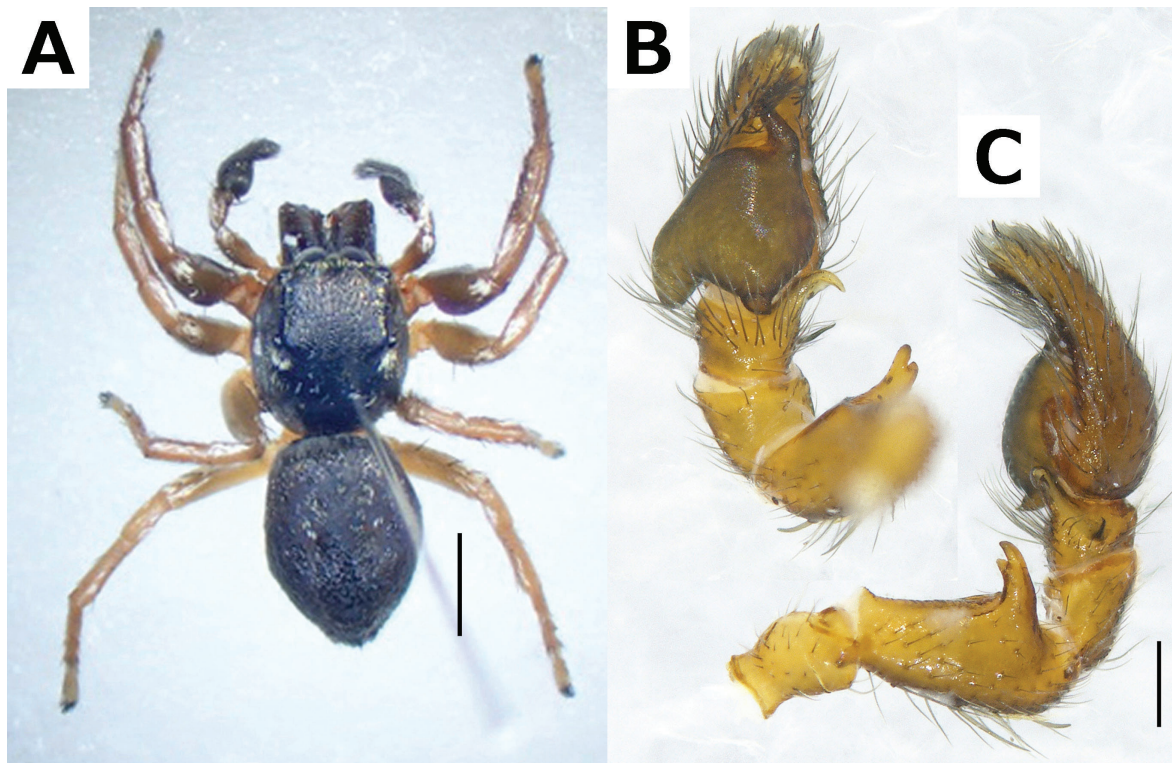


図 1. タカノハエトリ *Heliophanus lineiventris*. A, 雄全形; B, 雄触肢, 腹面; C, 同, 後側面. スケール = 1 mm (A); 0.2 mm (B-C).

マミクロハエトリ *Evarcha fasciata* Seo 1992 (図 2)

1♂, 大阪府大阪市西区靱公園, 2022年10月2日, 桂孝次郎採集.

靱公園東園の西部(なにわ筋より)のアジサイ群落の横のクサイチゴ・ヤブガラシ・ヘクソカズラのある雑草地のスウィーピングにて採集. 標本は桂が保管(アセトン処理による乾燥標本).

本種は日本, 韓国, 中国に分布する(World Spider Catalog 2023). 国内では, 本州から九州にかけて広く分布し, 関西においてもすべての府県で記録がある(新海ら 2022). ただ, 大阪府内での発見例は少なく, 現在までの明瞭な記録は, 大阪市東淀川区豊里(淀川の河川敷)における1件だけであった(野嶋 2001).



図 2. マミクロハエトリ *Evarcha fasciata*. 雄全形.

文献

桂孝次郎・奥野晴三 2022. 靱公園の昆虫・クモ他 種名リスト 2022. 靱公園自然研究会, 26 pp.

野嶋宏一 2001. アイチミジグモがいる淀川河川敷. くものいと, 30: 14-15.

新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2022. CD 日本のクモ ver.2022. 著者自刊.

World Spider Catalog 2023. World Spider Catalog, Version 24. Natural History Museum Bern, online at <http://wsc.nmbe.ch>, アクセス日: 2023年1月23日. doi: 10.24436/2

2017～2020 年に広島県で採集したザトウムシ目（クモガタ綱）

辻 雄介・辻 春香

近年の分布記録の少ない広島県で採集したザトウムシ目 Opiliones（クモガタ綱 Arachnida）を以下に記録する。

なお、標本データは「地名【緯度，経度】，個体数，採集日，採集者」の順に記載した。地名の広島県は省略し、標本は第一著者が保管している。

アカザトウムシ亜目 Laniatores

ニホンアカザトウムシ *Pseudobiantes japonicus* Hirst 1911

庄原市西城町【34.984741, 133.126923】，1♀，24.vi.2017，辻雄介。北広島町東八幡原【34.70990997, 132.1872288】，1♀，15.vii.2019，辻雄介・辻春香。

カイキザトウムシ亜目 Eupnoi

マメザトウムシ *Caddo agilis* Banks 1892

庄原市東城町【34.9853372, 133.1816393】1♀（図 1A），24.vi.2017，辻雄介。北広島町東八幡原【34.70990997, 132.1872288】，2♀，15.vii.2019，辻雄介・辻春香。

オオヒラタザトウムシ西日本亜種 *Leiobunum japonense japonicum* (Suzuki 1940)

府中市河佐峡，1♂（図 1B），26.vii.2020，下野誠之氏。

トゲザトウムシ *Odiellus aspersus* (Karsch 1881)

庄原市東城町【34.9853372, 133.1816393】，1 幼体，24.vi.2017，辻雄介。廿日市市もみのき森林公園，1 幼体，14.vii.2019，辻雄介。北広島町東八幡原【34.70990997, 132.1872288】，2♀，15.vii.2019，辻雄介・辻春香。

アカサビザトウムシ *Gagrellula ferruginea* (Loman 1902)

北広島町東八幡原【34.70990997, 132.1872288】，3♀，15.vii.2019，辻雄介・辻春香。

謝辞

末筆ではあるが、標本を提供いただいた下野誠之氏（大阪府）に厚くお礼を申し上げます。

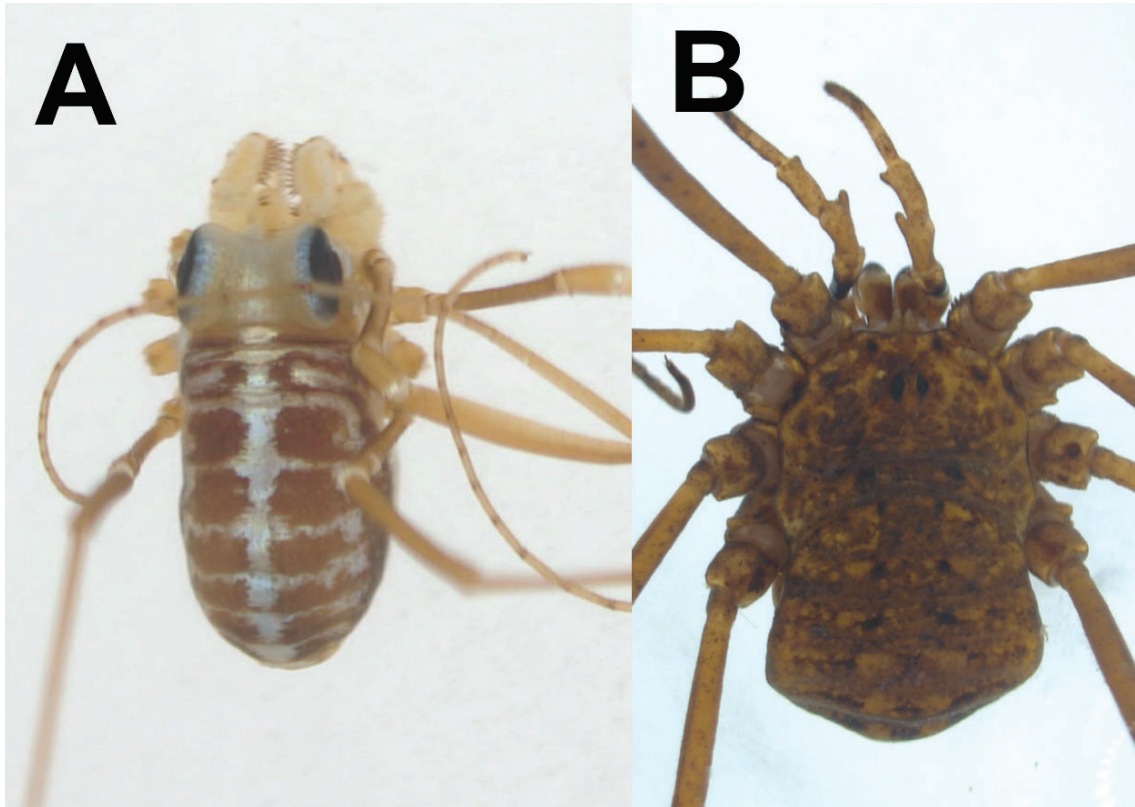


図 1. 広島県で採集されたザトウムシ目の 2 種. A, マメザトウムシ ; B, オオヒラタザトウムシ西日本亜種.

2015～2021年に愛媛県内で採集されたザトウムシ目

辻 雄介

2015年～2021年に愛媛県内で採集されたザトウムシ目について、未発表の標本データを以下に記録する。

標本データは「個体数、地名【緯度、経度】、採集日、採集者」の順に記載した。標本保管は株式会社相愛内（高知県高知市）である。

アカザトウムシ亜目 Laniatores

ニホンアカザトウムシ *Pseudobiantes japonicus* Hirst 1911

1♂, 久万高原町直瀬, 29.vii.2018, 久未遊. 2♀, 西条市西之川甲【33.802805N, 133.15264E】, 4.v.2015, 辻雄介・辻春香.

コアカザトウムシ基亜種 *Proscotolemon sauteri sauteri* Roewer 1916

1♀, 伊方町佐多岬, 15.iii.2018, 久未遊. 1♀, 松山市丸ノ内(城山公園), 11.xi.2017, 久未遊. 1♀(図1A), 松山市丸ノ内(城山公園), 31.i.2018, 久未遊. 1♀, 松山市丸ノ内(城山公園), 31.vii.2018, 久未遊.

カイキザトウムシ亜目 Eupnoi

トゲザトウムシ *Odiellus aspersus* (Karsch 1881)

1幼体, 松山市米野町, 2.vi.2018, 久未遊. 1♂(図1B), 久万高原町中組, 28.vii.2018, 久未遊.

アカサビザトウムシ *Gagrellula ferruginea* (Loman 1902)

1♀, 久万高原町猪伏林道, 28.viii.2021, 別府隆守. 1♀, 松山市東野, 26.ix-.8.x.2016, 久未遊.

クロザトウムシ *Gagrellula* sp.

2♂1♀, 久万高原町西谷【33.480867N, 133.009542E】, 24-26.viii.2021, 近藤英文.

イラカザトウムシ *Gagrellopsis nodulifera* Sato & Suzuki 1939

1♀(図1C), 松山市米野町, 2.vi.2018, 久未遊.

オオヒラタザトウムシ西日本亜種 *Leiobunum japonense japonicum* (Suzuki 1940)

1♂, 久万高原町西谷【33.480867N, 133.009542E】, 24-26.viii.2021, 近藤英文. 1♂2♀,

西条市西之川丁【33.811623N, 133.14103E】，4.v.2015，辻雄介・辻春香．3♀，西条市西之川甲【33.802805N, 133.15264E】，4.v.2015，辻雄介・辻春香．

ヤマスベザトウムシ *Leiobunum montanum* Suzuki 1953
1♂ (図 1D)，久万高原町中組，28.vii.2018，久末遊．

ヒコナミザトウムシ *Nelima nigricoxa* Sato & Suzuki 1939
1♀，久万高原町猪伏林道，28.viii.2021，別府隆守．

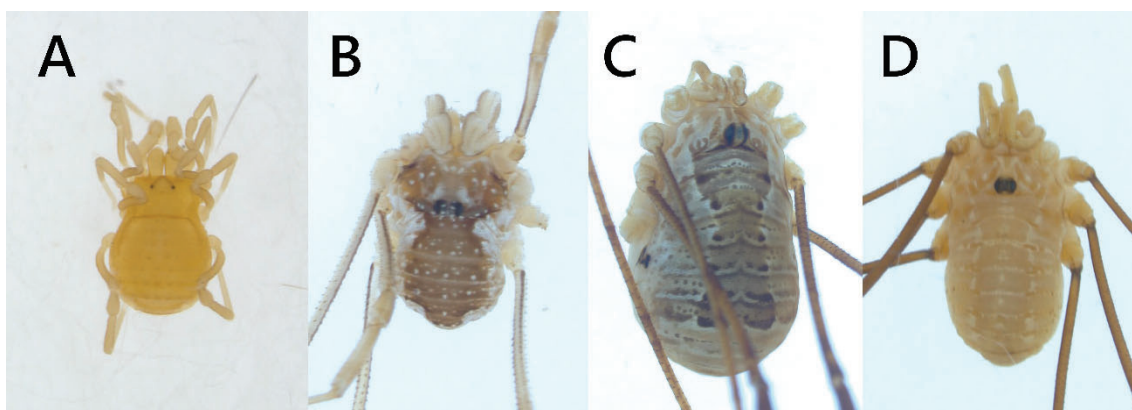


図 1. 愛媛県で採集されたザトウムシ目の 4 種. A, コアカザトウムシ♀ (松山市産) ; B, トゲザトウムシ♂ (久万高原町産) ; C, イラカザトウムシ♀ (松山市産) ; D, ヤマスベザトウムシ♂ (久万高原町産).

まとめ

2015年～2021年に採集された2亜目9種のザトウムシ目の標本データを記録した。これらの種のうち、アカサビザトウムシ、イラカザトウムシ、ヤマスベザトウムシは愛媛県レッドリスト2021（愛媛県 2021）で、要注意種（AN）に選定されている。

謝辞

標本を提供いただいた別府隆守氏，久末遊氏，近藤英文氏，採集に同行いただいた辻春香氏に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

愛媛県 2021. 愛媛県レッドリストの改訂について. <https://www.pref.ehime.jp/h15800/redrisuto.html>. 2022年1月21日閲覧.

ショウジコモリグモについて

荘司 康治郎

ショウジコモリグモ *Arctosa cervina* Schenkel 1936 は、2022年12月に谷川明男博士が発表された論文 (Tanikawa 2022) によりクロココモリグモ *Arctosa subamylacea* (Bösenberg & Strand 1906) のシノニムから復活し、日本新記録となったコモリグモです。生殖器形状による識別法については谷川博士の論文に譲り、本稿ではその外見的特徴と生息環境について記したいと思います。

シノニム関係になっていたクロココモリグモとの外見比較 (図1)

図1の左側がクロココモリグモ (以下クロコと表記)、右側がショウジコモリグモ (以下ショウジと表記) です。

サイズはほぼ同大、体型および基本的斑紋パターンもよく似ていますが、クロコの心斑 (心臓斑) が周辺の淡色部と同様の色合いであるのに対し、ショウジの心斑は赤味を帯び目立ちます。その色合いには若干変異があり、心斑のみが赤味を帯びる個体、心斑及びその前方を両側から挟むように位置する半円形の淡色斑もやや赤味を帯びる個体、あまり赤味を帯びない個体がいるようです。



図1. クロココモリグモ ♀, ♂ (左) とショウジコモリグモ ♀, ♂ (右).

生息環境の違い（図 2）

生息環境はクロコが「畑地や水田の周辺に多く，その他，草原，湿地，川辺の草地や林縁などでも見られる．草間，落葉上，地表面などを歩き回って獲物を探す．」（新海 2017）であるのに対し，ショウジは「石河原砂礫地の止水域周辺」に生息しています（図 2）．ただし同じ石河原内であっても，広範囲に泥が堆積しているような場所はクロコの生息域になるようです．

現在ショウジが確認できているのは，図 2 ① の山梨県 1 カ所，②，③ の埼玉県 2 カ所のみです．② の生息地は 2019 年 10 月の台風により完全水没，以降 2022 年 10 月までその生息が確認できていません．③ の生息地は 2022 年 12 月，ピンポイント生息地の数メートル先まで重機による河川敷整地が行われており，いつ完全消滅してもおかしくない状態です．私の地元で見つきたいのですが，東京の主要河川である多摩川流域ではまったく確認できていません．

谷川博士の論文（Tanikawa 2022）に挙げられた引用文献を見てみると，ショウジはロシア・中国の広範囲に分布しているようです．大陸における生息地は広大な高原や河川・湖周辺等で，あまり細かな生息条件の制約などないのかも知れません．生息地が「特定の河川敷砂礫地に限られる」のではなく，特定の河川敷内に「本来の生息地同様の環境が残されている」ということなのではないでしょうか．



図 2. ショウジコモリグモの生息環境.

同属のカワベコモリグモとの比較 (図3)

カワベコモリグモ *Arctosa kawabe* Tanaka 1985 (以下カワベと表記) は、図3 ① のような外見の個体が多いのですが、色合いに変異が多く、② のように腹部前方に淡色斑が表れる個体も見られます。そのタイプの幼体と思われるのが ③ で、④ のショウジ幼体と似ています。カワベはショウジと生息域が被っている(ときに混生する)ので、ショウジ♀タイプがカワベ幼体、ショウジ♂が小さめのカワベ♂と誤認されている可能性があります。カワベは流れのある石河原水際でも見られますが、ショウジはいまのところ止水域周辺でしか見つかっていません。



図3. ①, ② カワベコモリグモ ♀; ③ 同 幼体; ④ ショウジコモリグモ 幼体.

同属のカガリビコモリグモとの類似点 (図4)

カガリビコモリグモ *Arctosa depectinata* (Bösenberg & Strand 1906) (以下カガリビと表記) には、砂地タイプと畑地タイプがあります。図4の①が砂地タイプ、②が畑地タイプです。カガリビの心斑は和名の由来通りショウジ以上に赤味を帯びますが、心斑前方の両側斑紋は白っぽくなることが多いようです。③、④はカガリビ畑地タイプ幼体です。砂地タイプの幼体は見たことないので分かりませんが、ショウジ幼体と似たタイプがいるかも知れません。カガリビは河川敷でも見られますが、その生息域は主に砂地や河畔林周辺、ショウジやカワベのように水際で手のひら大の石がゴロ



図4. ① カガリビコモリグモ ♀; ② 同 ♂亜成体; ③, ④ 同 幼体.

ゴロしているような場所では見たことはありません.

成体出現期等について (図5)

ショウジ成体の採集記録は3月中旬から6月下旬まで、2019年4月下旬に卵のう保持♀(図5 ①)と仔グモを背負った♀(図5 ②)が見られました. どちらも手のひら大の石下の穴内に潜んでおり、地表面において「卵のう保持・子守り状態」でいる個体は確認できていません. ③は②の仔グモが分散した若齢幼体です. 同年7~8月には生息地に行っていないので自然条件下での成体生息状況は未確認ですが、♀は7月くらいまで見られるのかも知れません. 同年9月に同生息地で見かけたのは幼体のみでした.

④は2022年12月下旬に手のひら大の石下に潜んでいた♂成体です. 同地で同年3月に確認した本種と思われる11個体の成熟状況から「推測」すると、中齢以降の幼体~成体で越冬するものと思われます.

おわりに

ショウジの存在は同属コモリグモ各種の記録に埋もれている可能性があります. ク



図 5. ①, ② ショウジコモリグモ ♀; ③ 同 分散幼体; ④ 同 越冬み。

ロコ・カワベ・カガリビの標本（特にみ）をお持ちで、以下の状況に心当たりのある方がおられましたら再顕鏡して頂けたらと思います。

1. 田んぼや沼・畑周辺等の土壌ではなく、砂礫地で採れたクロコ。
2. 成熟している割にサイズが小さめ、及び丸みを帯びた（細長いという印象を受けない）体形のカワベ。
3. 石河原の水際で採れたサイズ大きめのカガリビ。

謝辞

私が同定を依頼した *Arctosa* sp. (現ショウジコモリグモ) について、クロココモリグモとの類似性等多数の示唆・教示を頂き、近縁種との識別法・分類上の扱い変遷について論文を通じ明快に解説して頂いた谷川明男博士に御礼申し上げます。

引用文献

Tanikawa, A. 2022. *Arctosa cervina* (Araneae: Lycosidae) removed from the synonymy with *A. subamylacea* and newly recorded in Japan. *Acta Arachnol.*, 71: 73–75.

新海栄一 2017. ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 124 pp.

コムラウラシマグモの交接の観察

加村 隆英

野外でクモが交接（交尾）している現場に遭遇することはあまり多くはない。筆者自身の経験では、造網性のクモ（例えば、ジョロウグモ、ムネグロサラグモ、コシロカネグモなど）の場合は、機会に恵まれて運よく観察できたということはあるものの、地表徘徊性のクモの交接を野外で見たことはなかった。ところが最近、ウラシマグモ科のコムラウラシマグモ *Otacilia komurai* (Yaginuma 1952) の交接を観察することができたので報告する。

2022年11月7日に大阪府豊能郡能勢町野間中で、落葉層をざるで篩って採集していたところ、コムラウラシマグモの雌雄が交接した状態で得られた（時刻は16時30分頃）。ざるを篩う強さは決して弱くはなかったのに、2匹が離れずに、ざるの目を抜けて落下してきたことは意外だった。ガラス管瓶に移して、しばらく観察したが、いっこうに離れる気配がないので、そのままの状態を自宅に持ち帰った。写真を撮影しつつ、20時45分頃までは交接を継続していることを確認した（その後、少し目を離



図1. コムラウラシマグモの交接（背面）。雄は、雌の左の第3脚と第4脚の間に前体部を入れている。

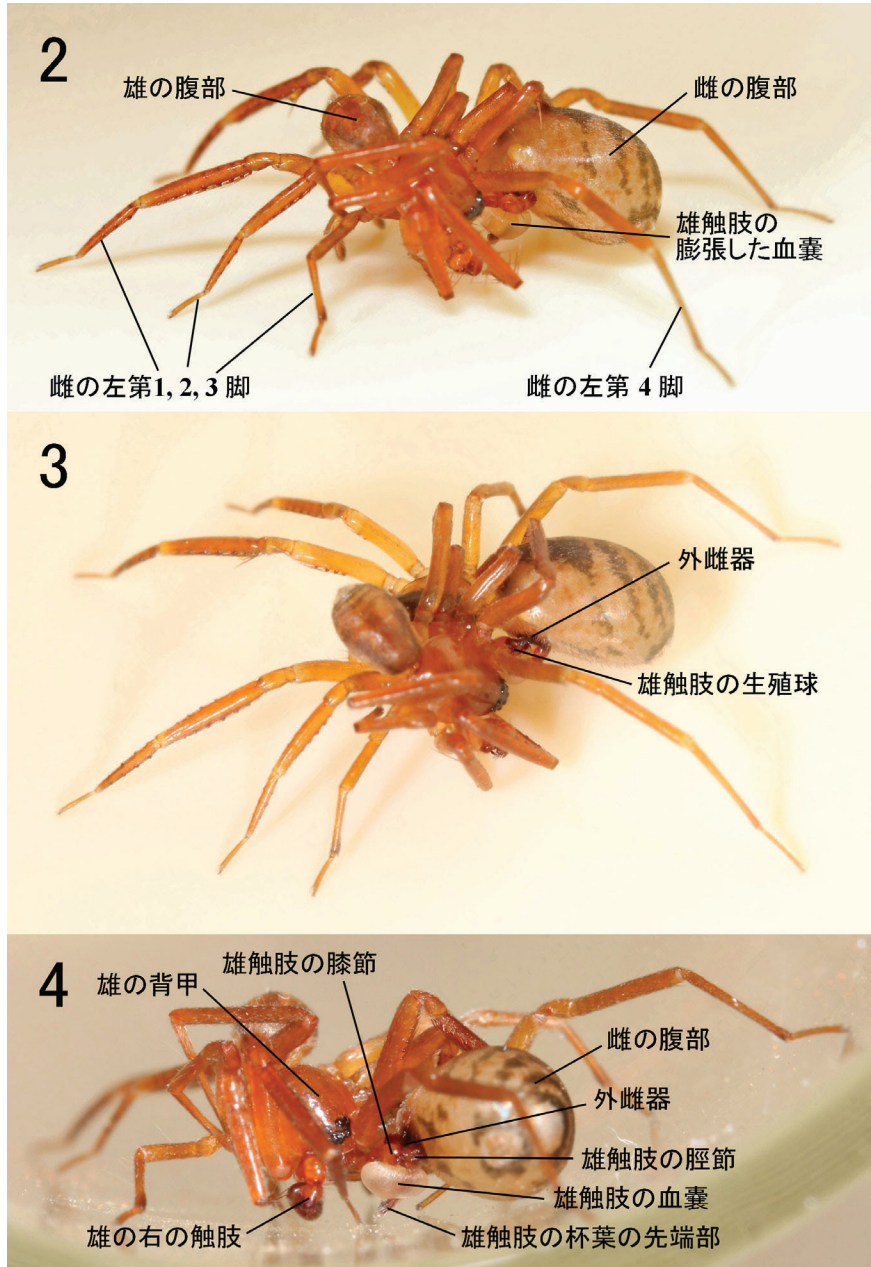


図 2-4. コムラウラシマグモの交接 (2, 雌の左側やや斜め上から; 3, ほぼ背面から; 4, 雌の後方から). 雄は左の触肢で交接している. 雌の腹部はほぼ 90 度回転し, 左側面が上に向いている.

している間に, 2 匹は離れていた). 少なくとも, 4 時間 15 分にわたって交接を継続していたことになる.

その後さらに交接する可能性を考えて, 2 匹をそのままの状態に放置したが, 翌朝には, 雄は死亡していた. 死因は不明である. 雄の体には特に異常は見られなかったので, 雌に襲われたわけではないように思われる. ただし, 雌に咬まれて, その毒によって死亡した可能性も否定はできない. 残った雌については, 産卵するかもしれないと考えて, 飼育を試みたものの, 11 月 11 日に死亡した. この間, 雌には餌は与え

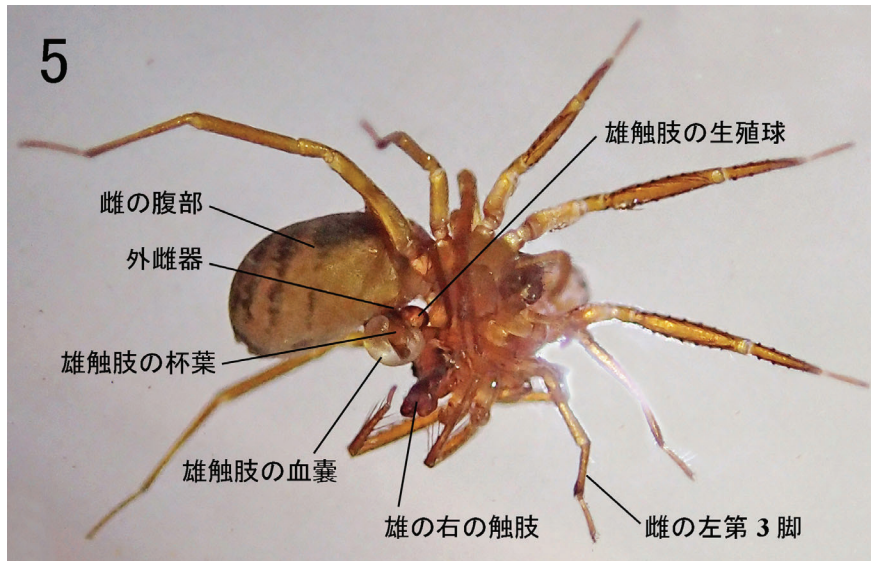


図 5. コムラウラシマグモの交接（腹面，ガラス越しに撮影）.

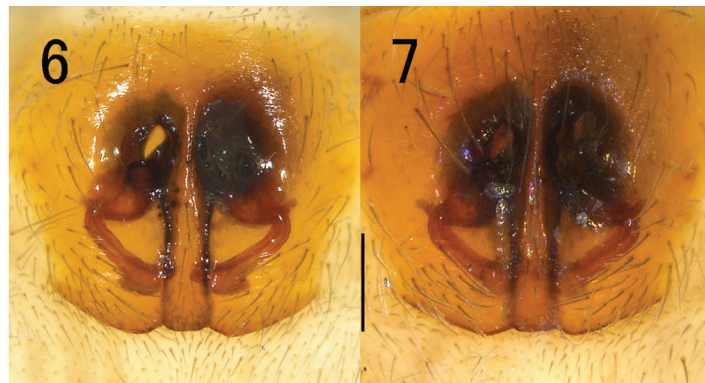


図 6-7. コムラウラシマグモの外雌器（腹面）. 6, 今回，交接が観察された個体と同じ場所で採集された雌（向かって右側の交尾口が交尾栓でふさがれている）; 7, 今回，交接が観察された雌（両方の交尾口が交尾栓でふさがれている）. スケール = 0.2 mm.

ていなかったが，通常，餌がなくても，1週間程度で死亡することは考えにくく，雌の死亡原因も明瞭ではない．ただ，過湿にならないように，水分量をやや控えめにしたことが影響した可能性がある．本種は，比較的多くの水分を必要とするのかもしれない．

交接のようすは以下のとおりであった（図 1-5）．雌雄は互いに頭が逆向きで，雄は雌の背甲の上にのしかかるような姿勢をとっている．これは吉倉(1987)や Foelix(2011)が，コモリグモ科の交接体勢として紹介しているものと基本的には同じである．雄は雌の左側の第3脚と第4脚の間に前体部を潜り込ませて，自身の左の触肢を外雌器に挿入している．雌の腹部は，90度近く回転させられて，左側面が上を向いている．雌雄は，この姿勢を保ち続け，雌は何の支障もないようすで歩き回る．雄の触肢の血囊が大きく膨らんでおり，それが収縮することはなく，膨張した状態が継続することが観察された．

稲葉 (1986) は、コムラウラシマグモと属は異なるものの、同じウラシマグモ科のヤバネウラシマグモ *Pennalithus pennatus* (Yaginuma 1967) の交接行動を詳しく観察している。それによると、ヤバネウラシマグモの交接における雌雄の体勢は、今回の観察結果とほぼ同様で、雄は雌の上に乗る、雌の第3脚と第4脚の間から外雌器にアプローチするとのことである。しかし、一方の触肢を連続して挿入している時間は、複数の観察において、いずれも1時間以下であり、また、触肢の血嚢が収縮することが観察されたという。これらの点は、今回のコムラウラシマグモの観察結果（触肢の挿入は4時間以上に及び、血嚢の収縮は確認されなかった）とは異なっている。

ウラシマグモ科のいくつかの種では、交接後、外雌器に交尾栓が付着することが知られており（例えば、Kamura 2005, 2021, 2022）、コムラウラシマグモも同様である。今回同じ場所で採集された別の雌の外雌器は図6に示すような状態で、向かって右の交尾口には交尾栓が充填されており、左の交尾口はきれいに開いていることが分かる。今回交接が観察された雌においては、左右の交尾口がふさがっている状態が確認できた（図7）。この雌は左側の交尾口で交接しているようすが観察されたので、それに先立って、右側の交尾口での交接を済ませていたことが分かる。その相手と同じ雄なのかどうかは、不明であるものの、先述の稲葉 (1986) によるヤバネウラシマグモの観察によれば、雄は一方の触肢で交接した後、すぐに体勢を変えてもう一方の触肢で交接を続けるとのことなので、おそらく、今回のコムラウラシマグモにおいても、同じ雄による交接が連続して行われたのであろう。

コムラウラシマグモでは、交接後、外雌器の交尾口は交尾栓によってふさがれるので、雄が左右両方の触肢で、同一の雌と連続して交接を終えた場合は、その雌は別の雄との交接はできないと考えられる。ただし、左右の交尾口の一方だけが交尾栓でふさがれている個体も存在する（図6）ので、雌は状況によっては、まだふさがれていない方の交尾口で2匹目の雄と交尾することも理論上は不可能ではない。いずれにせよ、雌の交接の機会はかなり限られているが、一方、雄は複数の雌と交接するのだろうか。雄としては、その方が有利であると考えられ、稲葉 (1986) もヤバネウラシマグモにおいて、一度交接した雄が別の雌と交接することを観察しているの、コムラウラシマグモもおそらく同様であろうと推測される。

今回の観察結果は、コムラウラシマグモの交接行動の断片を示しているに過ぎず、不明な点が多く残っている。今後、さらに新たな知見が集積されていくことを期待したい。

文献

- Foelix, R. F. 2011. *Biology of Spiders*, third edition. Oxford Univ. Press, New York, viii + 419 pp.
- 稲葉茂代 1986. ヤバネウラシマグモの習性. *Atypus*, 87: 1–8.
- Kamura, T. 2005. Spiders of the genus *Otacilia* (Araneae: Corinnidae) from Japan. *Acta Arachnol.*, 53: 87–92.
- Kamura, T. 2021. Three new genera of the family Phrurolithidae (Araneae) from East Asia. *Acta Arachnol.*, 70: 117–130.

Kamura, T. 2022. Generic placements of the Japanese species assigned to the genus *Otacilia* (Araneae: Phrurolithidae), with a description of a new genus. *Acta Arachnol.*, 71: 135–140.

吉倉眞 1987. クモの生物学. 学会出版センター, 東京, xii + 613 pp.

大阪府茨木市泉原のクモ， トゲグモほか

西川 喜朗

大阪府茨木市泉原は JR 茨木駅の北北西方の約 4 キロメートルのところにある山間部の集落で、小さな神社を過ぎると農耕地、二次林やため池があり、標高は約 250～350 メートルで、お手頃なフィールドである。

この地域のクモ相の報告は、2005 年に、当時小学校 4 年生であった池田勇介が、本誌「くものいと 38」に書いた 45 種が初めてである（池田 2005）。この報文は大阪市立自然史博物館の友の会の月例ハイキングの観察記録で、池田はこの中で、2004 年 9 月 19 日の月例ハイキングの折に友の会員のひとりが当地でトゲグモを採集したことが、2005 年 6 月 19 日には自身でトゲグモの幼体を採集したが、ガラスびんに入れ替えるときにつぶしてしまったことを書いている。そのため、保存標本がなく、「とったクモ」のリストにはトゲグモが記されていないため、まことに申し訳ないが見落としてしまっていた。

この月例ハイキングの行事の主体である「大阪市立自然史博物館友の会」の月刊誌「ネイチャースタディ (Nature Study)」にも、ほぼ同様の内容で報告されていて（池田 2006）、「泉原でとったクモ類」のリストには、オウギグモとトゲグモの 2 種も記録されていて、茨木市泉原のクモは合計 47 種となった。上記の 2 編の報文から、トゲグモは茨木市泉原のクモのリストに入れることができる。オウギグモは追加確認されたのだと思われる。

さらに池田は小学校 6 年生の夏休みの自由研究として「大阪のクモ」の大部の報告（池田 2007）をしている。ここには池田が採集・同定した大阪府下（のべ 22 以上の採集地点データ）の 157 種類のクモの標本のリストを掲げているが、茨木市泉原の「オウギグモ」と「トゲグモ」は記録されていない。

上記の茨木市泉原の月例ハイキングの下見（2004 年 8 月 26 日）で私が確認したクモを記録しておく。池田（2005, 2006）の記録になかったクモには和名の前に*印をつけた。

カレハヒメグモ、ニホンヒメグモ、オオヒメグモ、オナガグモ、ツリガネヒメグモ、カレハヒメグモ、ハツリグモ、*ナガコガネグモ、*ギンメッキゴミグモ、*ジョロウグモ、アシナガグモ、コシロカネグモ、ワカバグモ、*ヤミイロカニグモ、*イオウイロハシリグモ、*コアシダカグモ、マミジロハエトリ。

大阪府下でトゲグモの生息が確認されたデータがあるのは、池田（2005, 2006）と桂（2020）と本編ということになる。

補足. 池田（2005, 2006, 2007）が記している日付に、誤りがあるので、訂正しておきたい。茨木市泉原の採集データがいずれも「2004 年 9 月 21 日」となっているが、正しくは「2004 年 9 月 19 日」である。当該箇所は次のとおり：池田（2005），p. 35，9 行目；池田（2006），p. 9，リストの 1 行目；池田（2007），p. 41，本文 12 行目。

参考文献

- 池田勇介 2005. 茨木市泉原のクモ. くものいと, 38: 34–36.
- 池田勇介 2006. 茨木市泉原での月例ハイキングで見られたクモ類. Nature Study, 52(2): 8–9.
- 池田勇介 2007. 大阪府のクモ. くものいと, 40: 41–51.
- 桂孝次郎 2020. 大阪都心の靱公園「いのちの森」で見つかったトゲグモ. Nature Study, 66(12): 7–8.

京都府におけるイソタナグモの採集記録

加村 隆英

新海ら (2022) によると, イソタナグモは北海道から沖縄県まで, 国内に広く分布するものの, 京都府では未記録である. このたび, 手元の古い標本の中に京都府産の本種を見出したので報告する. 全形, 雌の生殖器, 雄の触肢の写真を掲げる (図 1).

イソタナグモ *Paratheuma shirahamaensis* (Oi 1960)

採集データ: 京都府竹野郡網野町 (現: 京丹後市網野町) 三津, 1♀1♂ (30.VII.1990), 1♀1♂ (1.VIII.1990), 加村隆英採集.

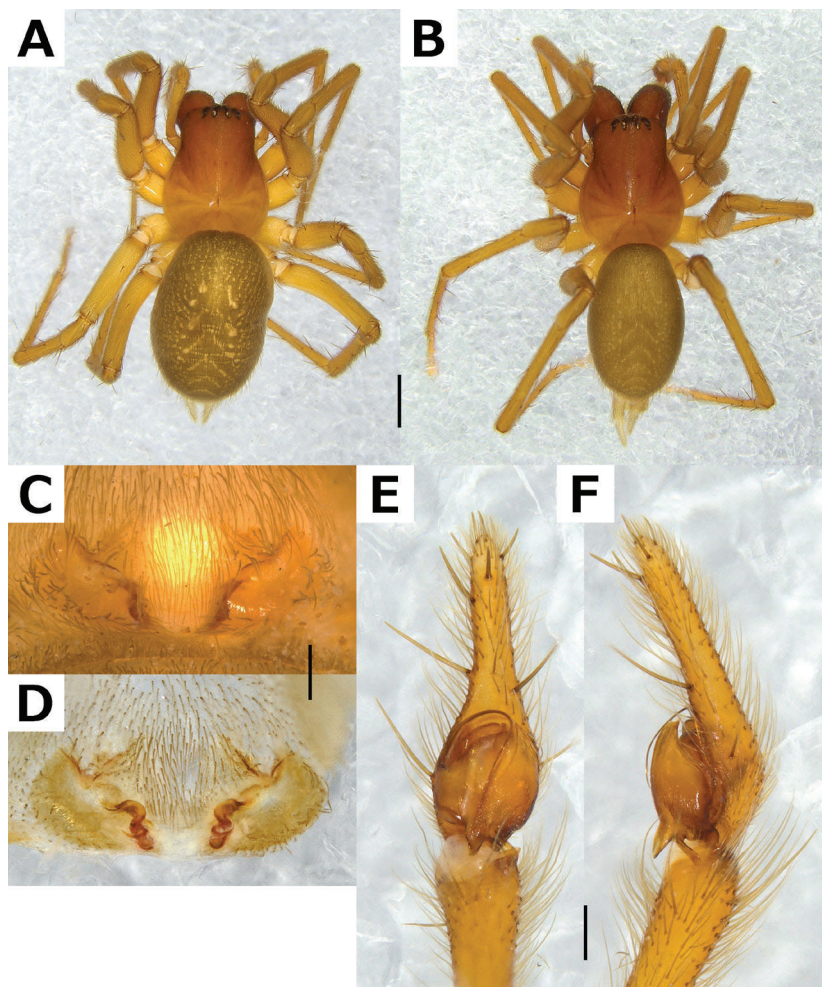


図 1. イソタナグモ *Paratheuma shirahamaensis*. A, 雌全形; B, 雄全形; C, 外雌器, 腹面; D, 雌内部生殖器, 背面; E, 左雄触肢, 腹面; F, 同, 後側面. スケール = 1 mm (A–B); 0.2 mm (C–F).

文献

新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2022. CD 日本のクモ ver.2022. 著者自刊.

京都土産

新海 明

東京クモ談話会通信に2014年から2020年までの6年間にわたって、折々に訪ねた京都のクモや神社仏閣、季節の移ろい、クモ仲間との交流について思いつくままに書いてきた。クモの論文でもない文章をたくさん書きとめ、ひょっとすると「新海さんもヒマですねえ」との感想を持った方もいるかもしれない。然り、その通りなのだが、それ以外にも小さな目的があるにはあった。埋め草としての原稿...という側面である。

私はこれまで、これと言って雑誌の編集作業を任されたことなどなかった。しかし編集作業をされてきた皆さんが、一番つらいのが「原稿が集まらない」ということには気づいていた。これには応えられそうだと思えたのだ。

とにかく原稿を書いて「ささいな埋め草」に。これが、私がずっと意識してきた目的だった。そして、塵も積もれば山となる。ここに投稿したこの原稿は「塵」をまとめ直し、その後の余譚を書き加えて一編にしたものだ。かなり大きな埋め草となった。

(1) 洛北、一乗寺あたり

その折々で、さまざまな種類のクモを調査の対象として、日本各地を回り続けてきた。沖縄へはかれこれ50回は通ったと思う・・・が、これ以上に訪れている場所があった。京都である。しかと数えたことはないが、沖縄行の2倍に達すると思う。そして、京都を訪ねるようになった理由も他とは大きく異なっていた。クモの調査で赴いたのは、おそらく数回だろう。学生時代に修学旅行で訪れたものを除けば、京都行の始まりは、立命館大学での京都クモゼミであった。1983年のことだ。毎月一回日曜日に開かれるゼミの前日に京都に入り、宿泊所を提供してくださった吉田真さん宅を訪問する前の半日を利用して、京都観光をしていたのだった。訪れるところは原則一箇所に決めていた。その方が印象が濃くなると思ったのだ。「なんと贅沢な！」とお思いの方もいるだろうが、目的はクモゼミなので「観光」は「おまけ」に過ぎなかった。その当時のお気に入りの場所は洛北に集中していた。これは吉田宅の近傍であることに関係したのに相違ない。特に、曼殊院を少し下った、なだらかに広がる畑地の農道から見た京都市街の眺めが素晴しかった。しかし、宅地化が進み、あの景観が今も残っているのか不安がある。

洛北に佇む寺院で足繁く通ったところがある。詩仙堂の近くに位置する金福寺だ。知る人ぞ知る洛北の小さな古刹だ。「京をひと目の墓どころ」の句が読まれた場所である。本堂の上方にある芭蕉庵へ上る途上の木立の隙間から見る景色は、まさにこの句の通りだった。本堂内に飾られた蕪村による天橋立図も見事だった。当時の人々も私と同じように、この図を見て丹後にある景勝地に思いを馳せたに違いない。兵庫豊岡で開催された学会大会の折に、私も天橋立に立ち寄った。百聞は一見にしかず。山頂から見た景色は金福寺で見た絵巻物通りだった。

一乗寺下がり松にある、詩仙堂は語る必要もなからう。噂に違わぬ名園である。ここを訪れたなら用意されたサンダルに履き替えて庭園内を逍遙せねば、庭園のすばらしさは味わえない。さらに、鷲森神社は隠れた名勝だ。旧吉田宅のすぐ近くにあったので、この神社をよく通り抜けたものだ。アワセグモが見られる杉の大木があり、夜間観察などもしたことがあった。紅葉で有名になった圓光寺もこの近くにある。TVで紹介されて急に観光客が押し寄せるようになった。ただこのモミジはまだ若いので、私にはイマイチの庭園であった。曼殊院をとり巻く小路の景観は京都でも一二を争う素晴しさだと、私は思っている。苔むしたなだらかな土塁上の白い練り堀とそこに縫うように続く樟や楓などの樹林は、初夏には穏やかな緑陰を作り、晩秋には鮮やかな紅葉の道を描くのだ。しんとした底冷えする真冬でも枯れた梢に小鳥が声を響かせ、冬の「か弱い」日差しが降り注ぐさまは、観光客が途絶えたこの時期にしか味わえない古の都路を醸し出す。凍てつく曼殊院の廊下は冷気を足元から這い上がらせ、あの有名な幽霊の襖を見たときの悪寒をも凌ぐ。しかし、この寒さもなぜかここでは清々しく感じるのだ。

曼殊院に隣接する武田製菓の薬草園も見所だ。寺院のはずれにある小さな門をくぐると、そのまま薬草園へと入れる。菰（こも）に覆われた朝鮮人参の苗床。色とりどりに咲く椿の花々が思い出される。曼殊院をはさんで薬草園と反対に位置する邸宅の板塀にはたくさんのヒラタグモの巣が見られた。白いテントの上にはヤスデらしき食べかすが乗っかっていた。「ヒラタの食性調査が出来そうですね」などと、吉田さんと話しながら朝の散歩を楽しんだことを懐かしく思い出す。

(2) 湯豆腐めぐり

かつて冬になると京都で湯豆腐の会を毎年のようにやっていたことがあった。最近では仕事の兼ね合いから数年に一度しかできなくなってしまった。

私の京都での行事は、衣笠の立命館大学のクモゼミとだいたい関わっている。あれは金野さんと畑守さんが結婚する前の1994年1月のことだったと思う。宮下さんを誘って京都クモゼミに参加したときのことであった。ゼミの翌日に観光をかねて大原に遊んだ。参加者は私と宮下さん。そして金野畑守さんの4人だ。朝は晴れていたが途上雨となり大原付近は雪原となっていた。寂光院と三千院を巡り、三千院の門前からバス通りまで続く観光客目当ての土産物屋をひやかしていたときのこと。昼過ぎだったが、雪のせいで薄暗くなったあたりの景色に、来訪者のためにあつらえた炬燵の下に敷かれた緋毛氈の鮮やかな朱色がやけに旅心をくすぐったのだ。舞い落ちる雪のせいもあったのかもしれない。一同食事をおかねて店内の緋毛氈を囲んだ。「湯豆腐」を注文して「ちょっと一杯」となったのは当然の成り行きだった。何せ面子が面子だ。金野氏は下戸だが、酒にはすこぶる詳しい。彼の選ぶ酒でまずかったものはない。飲めない人ほど味にはウルサイ。真理である。「のんべい」は逆に「酒なら何でも良いのだ」。だから味覚は当てにならない。だから、私もM氏もダメで、うるさいのは味でなく、口だけだ。

硝子越しに降りしきる雪はいや増すばかり。お銚子の数も積雪と共に増えていったのは言うまでもない。厠は店の脇にあるので、一度外に出なければならなかった。厠に出た者。皆ひとしく同じ感想だ。「あたり一面の雪景色」「きれいですね」。こんな空模様なので来店者もなく、店内にいるのはわれわればかりだ。長居をとがめられることもなく、炬燵の上にはお銚子が三列も並んだ。尽きぬ話は閉店まで続いた……。

これが京都湯豆腐会の始まりだった。これ以降、金野さんが湯豆腐の名店を探し、そこにメンバーが集まることになった。別段テーマや義務があるわけではなく、各自の近況やら、そのとき時の世間話をあれこれと語り合うだけだ。残念ながらあの時以来、雪見酒を味わうことは叶っていない。

ある年の冬(2011年2月12日)。名古屋で開催された中部クモ懇談会の総会の翌日だったと思う。おりしも天気予報は雪模様になることを伝えていた。しかし、昼頃に小雪がはらりと舞っただけで、その後すぐに時雨に襲われた。嵐山の渡月橋を背景にさっと降りしきる横殴りの時雨は、東京ではさまにならないが、ここでは良い「景色」となる。昼の湯豆腐の会のあとで甘味処に立ち寄り、渡月橋の袂で関西のメンバーとも別れた。谷川さんと渡月橋を渡り法輪寺へと足を伸ばした。ここに嵯峨嵐山を一望する展望台がある。京の町並みを見渡すと、時雨がもたらした暗い雲が船岡山の上を通り過ぎる有様が望めた。そして、ここ法輪寺にはすでに条光が降り注ぎ青空がのぞいていた。

(3) 洛西山崎あたり

2007年12月。この頃に谷川さんと調べ始めたキシノウエトタテグモの分布を「関西でもやろう」ということになった。毎年12月下旬に開かれる関西クモ研究会の総会の日程に合わせて、京都から大阪にかけて調査をすることになった。この調査でわかったことは京都を外れるとパタリとキシノウエが消失するという事だった。その京都の西のはずれの分布地が山崎だったのだ。サントリーの山崎ワイナリーがあると。あるいは天王山の地……とでも言えば「ああ、あそこか」と思い出される方もいるだろう。実は、ここにキシノウエが豊産することは、それ以前から知っていた。

私は、かつて仏塔を訪ね歩いたことがあった。おそらく国宝級の仏塔(現在24箇所存在する)ほぼすべてを見たと思う。京都や奈良の有名なものはもとより、東は山形羽黒山の杉木立の山中に佇む五重塔から、西は山口県の瑠璃光寺。果ては、瀬戸内に浮かぶ小島の丘にある向上寺や兵庫県加西市の山奥の一乗寺の三重塔など、さほど衆人に知られていない塔まで訪ねまわった。そして、「ついでにクモも調べた」のだった。洛西の山崎には宝積寺の三重塔があった。

JR 関西本線の山崎で下車し、傾斜地に沿って上った。周辺は宅地化されていたが、そのところどころに崖地がむき出しになっていた。当然、視線はそこに釘付けになった。あちこちに、あの丸い戸蓋が見えた。「やはり京都には、どこでもキシノウエがたくさんいるのだな」と、その当時は思ったものだ。丘陵上にたたずむ宝積寺の塔は、重要文化財だというのに、コンクリートで固められた駐車スペースの後ろ側にあり、

そのたまたまには失望した。がっかりしながらの帰り道に「大山崎山荘美術館」という看板が目にとまった。何気なく、その方向に歩みを進め寄り道をしてみたのだ。こんなときに、「穴場に」出会うものだ。私が感激したのは、そこに置かれた展示品ではなかった。

館内をひと通り見終えた頃、ベランダ越しに緑の森が目に入った。そこに出ると、森の彼方に淀川と平野の広がりが見えたのだ。山崎の合戦のあたりだろうか。かつて彼の地で繰り広げられた戦の歴史に思いを馳せたのは一瞬で、私には緑の木立を吹き抜けてきた風の心地よさの方が印象に残ったのだ。しばし時の立つのを忘れ、洛西を吹き抜ける緑の風に身を任せた。こんななんでもない場所との出会いが、得も言われぬ感動をもたらせる。

宝積寺のキシノウエトタテグモ調査で印象的だったのは、崖地だけでなく山肌の落ち葉の下にも、多くの住居が見られたことだ。神戸女学院大学の構内のキシノウエも同じような環境で多数見られると聞いたことがあった。崖地は単に私たちが見やすいから発見例が多いだけで、実は山林内の地面に直接住居を穿つものもたくさん存在する可能性もある。発見例の少なさは、落ち葉を掻き分けてキシノウエを探す研究者がいないだけかもしれない。

同様の感想を、九州でのキムラグモ調査の際にも感じたことがあった。南九州の茶畑の山すその崖地に数多くのキムラの住居が見られた。中にはコケで戸蓋が覆われているものもいた。その崖の上には森が広がっていたが、ここにキムラが全く生息していないとは考えられなかったのだ。思い切って、そこで調査をすれば良かったのだろうが、林床の落ち葉や下草を掻き分けての調査をするのは躊躇われたのだ。いつの日か、時間があれば林床の地面に生息するキムラやトタテの調査をしてみたいものである。

(4) 立命館大学から御室仁和寺

今でこそ、滋賀県草津市にある立命館大学理工学部は、かつて京都の衣笠にあった。ここで、吉田真さんが主宰するクモゼミが毎月一度開かれるようになったのは、クモ学会大会がここで行われた翌 1983 年のことであった。吉田さんからの手紙でゼミのことを知った私は、早速このゼミに加わることにした。

初参加の折に、京都駅からバスに乗り、下車したところは立命館大学の正門でなく、東側の別の入り口だったようだ。前年に訪れていたはずの理工学部棟が、どのあたりだったか全くわからなくなってしまった。付近の案内板を見ながら構内をうろついていると加村さんに出会った。加村さんはまだ京都府立大学の学生だった。彼に案内されて吉田研にたどり着いた。京都までわざわざ出かけるようになったのは、ゼミに加わるのが第一だったが、ここの蔵書にも惹かれたのだ。立命館大の生物学教室にはクモ研究者の吉田さんと、ハチを研究している遠藤彰さんが在籍していたのだ。クモとハチの研究者にとって垂涎の雑誌 *Psyche* がここには揃っていた。ゼミが終わると吉田さんをお願いして、この雑誌のコピーをもらったものだ（なんと、すべて無料で

コピーしていただいた)。この文献を利用してさまざまな原稿を書き、ゼミのネタにもした。

東京のクモゼミは終了後に飲み会となるのが通例だが、京都はそんなことがなかった。終了と共に流れ解散となるが多かった。しかし、1~2回の記憶しかないのだが、日和の良いときに付近の名勝を訪ねた。私が、印象に残っているのは衣笠にある御室仁和寺である。時は春。遅咲きの御室桜が咲き誇っていた。この桜は背丈の低い八重桜だ。境内には屋台が出ていて、御室桜を景色に甘酒を酌み交わしたように思う。

東京で桜に早緑の葉が混じりかけた頃になると、京都の御室の桜が気になる。五重塔をバックに雲のごとく広がる桜花を眺めてみたくなる。京福北野線沿いの桜のトンネルの桜は染井吉野なので、すでに盛りを過ぎている。御室駅で下車すれば、眼前にあの巨大な仁和寺の仁王門が見える。京都のクモゼミで初めてここを訪ねてから30年余り。その後3~4回は仁和寺に通ったように思う。立命館のキャンパスは今もここに残るが、理工学部は滋賀に移り、吉田さんはすでに退職され、かく言う私も還暦を過ぎた。ゼミの度に宿舎を提供して下さった吉田宅で、クモ学会の現状に憤り、あるべき姿を篤く語った夜も幾度かあった。

今度の春に、吉田さんを誘って御室の桜に会いに行き、昔語りをするのも一興かもしれない。

(5) 醍醐の随心院

古塔めぐりを始めた頃。我が国最古の五重塔が醍醐寺にあることを知った。

若狭小浜の明通寺の塔に感動し、次に山口の瑠璃光寺を訪ね、三番目が醍醐寺だった。だが、日本最古の塔は期待に反した。五重塔を取り巻く景色が殺風景に過ぎるのだ。さらに、京都の寺院ではよくあることだが、塔頭や名勝ごとに拝観料を取られるのも興ざめだった。

少し気落ちしながら醍醐寺をあとにし、せっかくなので付近の寺院を訪ねることにした。道標に随心院小町寺と書いてあるのを見かけ、そこに向かった。観光客は一気に減り、境内は静寂に包まれていた。庭園には小野小町が使っていたという古井戸があった。その周囲の苔むした崖の様子が一目で気に入った。

「きっと、いるぞ」。井戸の際の崖に目を凝らす・・・と、戸蓋が目に入った。やはり「いた」。さすがに京都の景勝地なので、掘り取りをする勇気はなかった。谷川さんの技があれば可能かもしれない。ノグチゲラに匹敵するその技を、残念ながら私は有していない。ただ複数のキシノウエトタテグモの戸蓋を確認しただけであった。小野小町女史が、この庭を眺めて過ごした時代にもキシノウエトタテグモはここでひっそりと暮らしていたのだろうか...と書くと、「たかが千年前だから、いたに決まっているじゃないか」という声が聞こえそうだ。しかし、キシノウエトタテグモの分布はかなり攪乱されている可能性が高いことが最近になって分かってきているのだ(谷川・新海 2014)。ごく近世に庭師によってもたらされたかも知れないのだ。

関東に住んでいる私は、キシノウエトタテグモは身近なごくありふれた存在だった

ので、日本のほかの地域でも同様に豊産するものと思っていた。しかしながら、クモタケの調査（畑守ら 1997）や谷川さんと巡ったキシノウエトタテグモの分布調査の結果は、この様な印象が思い込みにすぎないことを示していた。

本州・四国・九州でのキシノウエトタテグモの分布は、かなり偏ったものだった。東京や京都ではどこでも頻繁に観察できるクモだが、その他の大部分の地域では、ごく限られた場所に見られたのだ。東京や京都の分布の方が、全体から見れば特異なようである。

キムラグモを求めて九州の各地を谷川さんとともに回ったが、その際によく二人で話したことがある。「九州でキムラグモを採集したいという人の案内は簡単だが、キシノウエトタテグモを採りたいという人の案内は難しいね」というものだ。「九州でキシノウエトタテグモの採れる場所は」と問われたときに、ここに行けば確実に採集ができると紹介できる所は「ない」のである。「かつて、この辺りで採集したことがありますよ」という程度が限界である。

そのような分布が、キシノウエトタテグモの本来のものであるかも知れない。

文献

谷川明男・新海明 2014. キシノウエトタテグモの分布状況と集団構造. *Kishidaia*, 105: 21–27.
畑守有紀・新海明・上田俊穂 1997. クモタケ *Nomuraea atypicola* の全国分布調査結果 (1993～1996年). *Kishidaia*, 72: 34–47.

(6) 金福寺、芭蕉庵の紅葉

2015年の晩秋、久しぶりに洛北にある金福寺を訪れた。京都の名だたる景勝地のなかでもここは私の心のなかに残る一二を争う場所だ。

初めてこの地を訪れたのは、今から三十余年も前になる。当時は衣笠にあった立命館大学の理工学部で行われていた京都クモゼミに参加するために、その前日に入京し名勝旧跡を一カ所だけ尋ねることに決めていた。当時、私はすでに教員となっていたが、京都を訪れたのは中学の修学旅行、1970年の大阪万博のついで、そして1982年のクモ学会大会の折になど三回ほどしかなかった。せっかく毎月(!)のようにクモゼミに通うのだから京巡りもせねば損だと考えたのだ。新幹線代は馬鹿にならなかったが、宿泊費は不要だった。吉田真さん宅が定宿となったからだ。そして、吉田宅が修学院にあったことが、私が洛北方面に詳しくなった理由でもある。

関東ならばめったに出会えないオダカグモやアワセグモは、すべて吉田宅の近傍の神社や山道で見たものである。アワセグモなどに至っては吉田さんの裏手にある鷲森神社で懐中電灯を借りて夜間観察までさせてもらった。

一乗寺でバスを降りて緩やかな坂道を詩仙堂へと向かう。その途上にあの決闘で有名な一乗寺下がり松がある。その先を右に折れる。閑静な住宅地の間に続く小路をジグザグに少し進めば、左手に小さな石級が見える。この階段の上にある小さな古刹が金福寺だ。堂宇の前の庭を巻くように小路が裏山へと続く。ここを上ると木々の間に京都市街が展望できる。そこに句碑がぶら下げられていた。「行く春や、京をひ

と目の、墓どころ」。ここ金福寺からの情景を詠んだものであった。傍らには与謝蕪村のお墓があった。そして、彼が敬愛してやまない松尾芭蕉を偲んで建てた芭蕉庵も佇んでいる。晩秋の芭蕉庵は紅葉の絨毯に囲まれ、小春日の優しい風がはらはらと赤や黄色の枯れ葉を散らせていた。

堂内に上ると、蕪村筆の天橋立の鳥瞰図が掲示されてある。縁側からお庭を見渡すと、さして広くない庭園が、墓どころの裏山の樹々と青空を捲き込み雄大な寺院のお庭にも見える。先人の庭園造りの知恵に感服した。

京都は私のような年配者にとっては「若者にとってのディズニーワールドにも匹敵する」。いつもこんな子供じみた感想を抱えて新幹線に乗る。京都は古きものと新しきものがいつの時代でも混在していたようだ。京の名だたる寺院を巡ったあとで京都の駅ビルに戻り、ともすれば京都には不釣り合いにも見えるあの雄大な構内の空間を見まわし、さらに駅前にそびえる京都タワーを見上げると、必ずこのような感想に打たれるのだ。

洛北の小さな寺院にも脈々と連なる歴史があり、今へと続いていた。そんなお寺に出合うたびに、他にもそんな名勝旧跡が古の都にはいくつも隠れているに違いないと思うのだ。そして、そんな小さな発見と感動の数々が、私を何度も京都への旅へと向かわせる原動力になっているに相違ない。

(7) 京都女子大への坂道にて

2015年夏の終わりに京都で行われた日本蜘蛛学会大会は、中田さんが勤務する京都女子大学で開催された。京都は毎年のように訪れているのであるが、最近タクシーや地下鉄や私鉄ばかりを使い、バス路線はあまり利用していなかった。

京都国立博物館や三十三間堂の近傍に行くのだから、久々にバスに乗ってみようと思いつきのバス停に並んだ。京都の夏の暑さは半端ない。この路線は東山を巡る観光のゴールデンルートである。長蛇の列の最後に並んだ。初めに来たバスには案の定、乗車はできなかった。次のバスにしようと1台目をやり過ごした。次のバスはすぐに来たのだったが、車窓を見ると中にはすでに乗客がいるではないか。「あれっ、始発では・・・」と思ったのだが、このバスは四条大宮から京都駅を経由するバスだと分かった。京都駅で下車する方もいたので、何とか座席に座ることができた。しかし、車内には後から後からお客が乗り込んできた。さすが日本一の観光都市だ。

ふと、乗車してきた人たちの話し声が耳に飛び込んできた。英語フランス語中国語などなど。地元の方々の会話は皆無なので、さながら外国旅行をしているような錯覚に陥った。車内はすし詰め。京都国立博物館・三十三間堂の前でほうほうの体でバスを降りた。ここから坂道を登ればすぐに京都女子大があるはず・・・と思って降りたのだが、早合点だった。博物館は広大なのだ。この塀に沿って歩いたが、ずっと先まで塀は続いていた。炎天下を道のどんつきまで進み左に曲がると、そこに京都女子大の最寄りのバス停東山七条があった。もう一つ先まで乗車していたらよかったのだ。案内書をよく確認すべきだった。バス通りを渡れば女子大へと続く坂道が見えた。「あ

あ、ここに間違いない」

女子大への緩やかな坂道の左手は妙法院という門跡寺院があり、趣ある土塀が続いていた。その壁の上に点々と無数のシミがあるのに気付いた。生息場所の環境やシミの大きさなどから「えっ、チリグモか」と予想した。京都ならば「あり得るかも」と……。 「大産地だなあ」などと思いながらクモを追い出したり、網の様子をじっくり調べることもなく、吹き出す汗を拭きながら大学の会場へと急いだ。

これが金曜日の昼過ぎであった。そして、それから二日間の大会の日程を終えた日曜日に、谷川さんと再び女子大の坂道を下った。金曜日の帰りは女子大のバスで、土曜日は懇親会後の暗い夜道を吉田さん宅に向かったのだから、昼間に谷川さんとこの坂道を歩くのは初めてだった。

土塀の白点が気になった。「谷川さん、これってチリグモかなあ」...と、谷川さんが目を凝らして見てくれた。帰ってきた返事は「ネコハグモのちび助じゃないかなあ（ちび助なので断定はできないけど・・・を、含んだ答え）」だった。「ああ、またやらかしてしまった！」しっかりと確認しないままの思い込みで判断したのだ。すでに目もあまり利かないのだから、ルーペなどでよく見ないといけないものを……。

私はここ十年以上、ただ一つだけ心がけていることがある。思い込みでしっかり確認できない同定結果は発表していない。ジョロウグモやトリノフンダマシの類は別ですよ。けれども、怪しいものは必ず谷川さんに確認してもらうことにしているのだ。同定能力に欠けるクモ愛好家としての嗜みである。「威張ることではありません。当たり前です」という叱責の声が聞こえそうですねえ。でもでも、そんなパツと見ての同定結果を発表してしまうことを皆さんもすることがありませんかあ。

(8) トタテグモとあぶり餅

ある年の冬（2011年2月11日）。名古屋で開催された中部クモ懇談会の総会の翌日だったと思う。おりしも天気予報は雪模様になることを伝えていた。しかし、昼頃に小雪がはらりと舞っただけで、その後すぐに時雨に襲われた。嵐山の渡月橋を背景にさっと降りしきる横殴りの時雨は、東京ではさまにならないが、ここでは良い「景色」となる。昼の湯豆腐の会のあとで甘味処に立ち寄り、渡月橋の袂で関西のメンバーとも別れた。谷川さんと渡月橋を渡り法輪寺へと足を伸ばした。ここに嵯峨嵐山を一望する展望台がある。京の町並みを見渡すと、時雨がもたらした暗い雲が船岡山の上を通り過ぎる有様が望めた。そして、ここ法輪寺にはすでに条光が降り注ぎ青空がのぞいていた。

...と、談話会通信 143 号に掲載した「京都だより (2) 湯豆腐めぐり」に記したことがあった。実はこの日は、京都のキシノウエトタテグモを採集するというミッションがあった。谷川さんが DNA 分析をするためだった。

前夜に名古屋から京都に入り一泊して、朝、湯豆腐の会の待ち合わせ場所に行く前に京都駅の近くにある渉成園に出かけた。2月の早朝だったので観光客はいなかった。出来るだけ人目のつかない場所でささっと採集し、嵐山へと向かったのだった。

湯豆腐の会を終え、法輪寺からの眺望を堪能した後で、嵐電嵐山駅まで戻り電車で北野白梅町まで移動した。次の目当ては京都の北部でのキシノウエのサンプルを得ることだった。

場所の選定は私に任されていたので、今宮神社に行くことにした。ここに行くのにはサンプル以外にも目的があったからだ。北野白梅町からはタクシーを利用した。今宮神社は大徳寺の裏手にある。神社の入り口で車を降り、参詣者のいない通路とがけ地を探した。我々は九州でのキムラグモ採集で鍛え上げた連係プレーがある。私が先行して巣穴を見つけ、谷川さんが携帯する武器（ピンセットと薬さじ）で素早く掘り取りをするのだ。サンプルの採集は数分で終わった。

そして、今宮神社へ来たもう一つの目的に向かった。今宮神社本殿の正面を直進せず右の参道に折れると、ここに昔からの続く名物「あぶり餅」の店があるのだ。私は、かつてここを訪れた時にあぶり餅を初めて食べ、その瞬間に「これは谷川さん好みだ」と確信したのだ。「いつかチャンスがあれば谷川さんを連れてこよう」。それを叶えたのだ。

あぶり餅は、細竹の串先に指先ほどの大きさの餅が刺さり 10 本ほども添えられていようか、そこに昔ながらの甘い白味噌だれがしたたるように付けられている。最近の流行りの甘さ控えめなどどこ吹く風のように古来の日本庶民が憧れた甘さなのである。これぞ「谷川好み」だ。

谷川さんの反応は予想通りであった。あぶり餅を食べながら、前の店のあぶり餅の味はどうなんだろうかという話になった。実は、私が以前に来た時に入った店はその「前の店」だったのだ。だから、「まったく同じ味ですよ」と答えた。谷川さん曰く「じゃあ、こちらが本家で、向こうが元祖というわけかあ」。ご存知の方もいるだろう、われわれ世代が等しく読んだ筒井康隆「アフリカの爆弾」の「本家ターザン」「元祖ターザン」の話だ。

店内では大笑いとはいかず、笑いをかみ殺して店を出て驚いた。参詣路を挟み向かい合うあぶり餅の店の一方には「本家」、他方には「元祖」と染め抜かれた暖簾がかかっているのではないか。谷川さんがしきりにシャッターをきっていたのは言うまでもなかった。

古の京都の寺社で「アフリカの爆弾」に出会うとは思ってもいなかった。

(9) 関東地方の希産種が…

私が初めてアワセグモを見たのは、大阪で万国博覧会が開催された 1970 年のことだ。万博の会場を訪れたついでに、東海遊歩道の西のはずれに位置する箕面（東のはずれは東京の高尾山だ）を訪れた時だった。何の樹木かはすでに忘れてしまったが樹皮下に潜んでいたカニグモのようなクモを採集して持ち帰って兄に見てもらったところ「アワセグモと言い、関西には多いんだ」と教えてもらった。

それから十数年経ち、吉田真さんが主宰していた関西クモゼミに毎月のように通っていた時に、アワセグモの話を何気なくしたところ、吉田さん曰く「家のそばの神社

の木にたくさんおる」というのだ。当時、私は吉田宅を京都の定宿のように使わせてもらっていたので、「ではアワセグモの調査をしよう」ということになった。

アワセグモがたくさんいる神社というのは、左京区修学院離宮のそばにある鷲森神社であった。吉田宅の懐中電灯を拝借して調査をした結果は、かつて中部蜘蛛懇談会会報の「蜘蛛」に報じたことがある（新海 1992）。アワセグモは最近になって関東地方（東京都・埼玉県）でも貞元さんらや大生さん・平松さんによって発見されたが（貞元 2013, 新海・谷川 2018）、かつては関東地方では見られないクモであった。

同じように関東ではあまり採集できず、関西に来れば比較的頻繁に見られるクモとしてはオダカグモがあげられる。吉田宅から比叡山へと延びる「雲母坂（きららざか）」の溪流沿いの山道でオダカグモをいくつも発見したことがあった。80年代の東京では（今も同じかも）オダカグモは希産種だったので驚いたものだ。私が「オダカだ！オダカだ！」と発見に興奮していたら「このクモならこのあたりに、たくさんおるで」と言われて、あぜんとした思い出がある。

極めつけは「ヒトエグモ」だろう。初めて関西へ行ったときに「ひと目ヒトエを！！」と思ったものだ。吉田さんは京大の学生時代に寄宿していた東福寺の宿坊で発見したことがあると言っていた。「そうか、寺社の建物内でしか見られなければ無理だろう」と納得した。しかし、当時関西クモゼミに参加していた牧野達也さんは自宅付近に「な、なんと蜘蛛礁（漁礁のクモ版という）」を作り「あわよくばヒトエグモがざっくざく捕獲できるかな」という、ものすごい野外実験をしていたことがあった（牧野 1999）。結果的には、残念ながらヒトエグモの捕獲には至らなかったというが、「大胆な発想だなあ」と感心したものだ。その後も関西に行くと「京都の動物園で見つかったが、改修工事があり、もう駄目だろう」などという噂話は小耳に挟んだこともあった。

ところが最近になって、2017年2018年と立て続けて藤野義人さんにより、関西クモ研究会の「くものいと」や東京蜘蛛談話会の「KISHIDAIA」に発表されたヒトエグモの報告には、まさに度肝を抜かれた（藤野 2017a, 2017b, 2018）。藤野さんはヒトエグモの生活史を解明したばかりでなく、京都府やその周辺でのヒトエグモの分布まで明らかにしたのだ。そして、「ヒトエグモは『屋内性のクモである』という通説を捨て、屋外の石像建造物や木造建造物、大木の樹皮等を積極的に探索することにより成果が得られると確信している」と述べている（藤野 2018）。

私も「今までの通説を捨てよ」と、どれだけ言ってきたか。藤野さんによるヒトエグモの発見で、私も「まだまだ甘い」ことを思い知らされた。もうすでに、クモ人生の終盤に差しかかっている私の、この先の夢のひとつは野外で「ヒトエグモをこの目で見たい」というものだ。藤野さんの報告を読む限りポイントさえつかめばヒトエグモの採集（もう捕る気はないので、この目で見るだけにしよう）はさほど困難ではなさそうだ。そして、この「京都だより」はヒトエグモの観察報告をもって最終回としよう。

引用文献

貞元己良 2013. 都内でアワセグモが見つかった. *Kishidaia*, 102: 1-2.

新海明 1992. 洛北鷲森神社のアワセグモの観察. 蜘蛛, 25: 5-7.

新海明・谷川明男 2018. 採集情報. 遊絲, 43: 7-8.

藤野義人 2017a. 京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査. くものいと, 50: 48-51.

藤野義人 2017b. 京都市上京区御霊神社に生息するヒトエグモ. Kishidaia, 111: 24-31.

藤野義人 2018. ヒトエグモの生息分布調査2 (京都市以外の地域). くものいと, 51: 10-14.

牧野達也 1999. 蜘蛛礁計画. くものいと, 25: 12-20.

(10) ヒトエグモをひと目見たくて

私がクモに興味を持ち熱心にやるようになった中高生の時代は、意外にも珍蛛を数々ゲットした。シャラクダニグモ・オビボソカニグモ・キマダラヒラタヒメグモなどだ。だが採集したクモの中で、私の感動はアカイロトリノフンダマシに勝るものはない。私にとっては葉裏にくっついた「赤い宝石」だった。

シャラクダニグモやキマダラヒラタヒメグモなどと違い、やはりアカイロトリノフンダマシはクモ採集家を魅了するクモなのだ。これに匹敵するクモといえば、言わずと知れたワクトツキジグモやイセキグモ類、そしてカトウツケオグモやヒトエグモなどがあげられよう。いずれもレアであるとともに「魅せられる」クモだからだろう。

今でこそワクトツキジもイセキグモ類も、日本の各地でぽつぽつと採集記録が載るようになったが、かつては「幻のクモ」だった。私がクモの採集を始めたころには「一生に一度採れるかどうか」と言われていた。そして、ヒトエグモは数年や十数年に一度、関西から「採集情報」がもたらされるくらいで、関東にいる私は「採集は無理だろう」とあきらめていた存在だった。兄によれば生息地は関西それも奈良京都の神社仏閣さらに室内だというのではないか。たまさか訪れる京都のひと気ない寺院で、じっくりと壁面の隙間をのぞいてみたこともあったが気配を感じたことすらなかった。

それが、藤野義人さんらによって関西で大量に発見され、その生活史まで調査されたという。「これは京都に行くしかない」と決心して2019年2月、名古屋で毎年開かれる中部蜘蛛懇談会の総会に合わせて関西にヒトエグモ探しに乗り込んだ。いつも同行してくれる谷川さんは国際クモ学会のシンポジウムに呼ばれてニュージーランドに出かけていた。というわけで、今回は関西在住の金野さんに案内してもらった。藤野さんがすでに調べてある神社仏閣に行くのはプライド(あまりないのだが...)が許さなかったが、いる場所で一応生息している場所の確認をしておいた方が良さだろうということになった。金野さんが最初に選んだのは、京都のはずれにある柳谷観音だった。

まずは寺院の石垣の隙間を、目を皿のようにして見ていった。さらに、寺院の脇から山中に道が伸びていた。そこを進むと瓦屋根が無造作に捨てられていた。「ここだ」と思って行くと、すでに金野さんも探していた。思いは同じようだ。瓦を一つずつめくりながら、目を凝らした...が「いなかった」。いくら探しても「いない」となると、冬の寒さが身に沁みこんできた。寒さもあり、ここはあきらめて、次に松尾大社に向かった。かつて、この神社は観光で訪れたことがあったが、到着すると「やけに神社の境内が明るくなっている」と金野さんが言う。気分的なものではなく、神社の境内

に光が差し込んで明るかったのだ。しばらく境内に進むと理由が分かった。一昨年（2018年）、関西を直撃した二つの台風により、境内の樹木が風倒にあったせいだ。ここ松尾大社でも「ここは」と思われる場所を探し回ったのだがヒトエグモは発見できなかった。冬のせいにしたり、密度の低いせいにしたりしたが採れなくては仕方がない。あきらめて京都西郊の別の神社仏閣に移動したが...、いずれも見つけるには至らなかった。やはり簡単に見つけることはできないようだ。冬の日は短い。既に西にかなり傾いていた。

私は、今日のうちに名古屋入りしなくてはならなかったために、気がせいた。「ヒトエをひと目見る」ために、藤野さんの調査地である上御霊神社に行くことにした。上御霊神社も以前に私は行ったことがあった。桜の時期で鴨川沿いの桜を眺めながら、川端からこの神社に入った覚えがある。とても静寂で落ち着いた雰囲気の家だった。その佇まいは前回とまったく変わらなかった。灯籠を見つけると、その上にいずれも平らな石が置いてあった。藤野さんの仕掛けだろう。4つ目の灯籠でヒトエグモのちび助を「見つけた」。さらに、そのそばの灯籠上の石の下にはメスの成体「こいつは大きい」ものだった。こんなところにいるのか。見つけてしまえば何のことはなかった。特別な場所に生息しているわけでもなかった。金野さん曰く「土と接した石の下にはいないようだ」。確かにそんな気がした。

ただの一度、実際の生息状況を「知ったか、知らない」かは、やはり大きな違いがある。念のために言うておくが、このヒトエグモは藤野さんの調査のために採集などはしなかった。この目で自然下のヒトエグモを確認したかっただけである。「ナルホド、こんな風に冬でもいるのか」。野外で初めて見たヒトエグモの姿を脳裏に刻み込んで、名古屋へと新幹線に乗り込み、京都を後にした。

（この原稿を認めてから、藤野さんからヒトエグモに関するさまざまな情報を頂いた。そして京都に来た折には「ご案内します」と記されていた。けれどもこんなわけで、すでにヒトエグモを観た後であった。藤野さん、次の機会に是非お会いしてヒトエ談義に花を咲かせましょう）

（11）京都だより余譚（キムラグモと関西クモ研究会例会）

ここ数年間、新型コロナのせいで日本中のクモ活動が停止してしまった。2022年の秋頃から経済活動もそろりと動き出し、各地のクモ活動も再開しつつあった。東京蜘蛛談話会も2022年12月に3年ぶりに例会を催すことになった。講演を申し込み「いざ...」というある日の朝、のどが痛み咳き込んだ。体温を測ると37度7分。これはまずいとかかりつけ医でPCR検査をしてもらったら案の定、COVID19陽性だった。7日間の自主隔離である。翌日には37度1分となり、体調も元に戻ったが日曜日に開催される東京蜘蛛談話会の例会には出席できなかった。

せっかく準備し、久々にやる気満々だったのに残念！！「そう関西クモ研究会の例会が1月だ」谷川さんと大阪のキムラグモの生息地をめぐってから、関西クモ研究会例会の会場へ行くことになっていた。私にとっては調査自体が久しぶりだった。例

会の前日の夜に、なんと...奈良に入った。キムラの生息地である大阪の枚方公園には、ここ近鉄奈良駅から一本で行けるといなのだ。翌1月21日朝9時過ぎの電車で枚方公園の最寄り駅である額田駅までおよそ30分。ここはあの有名な生駒山への登山口でもあった。

駅からすぐに始まる急峻な登り坂を谷川さんが先導するが、久しぶりの山行で息が上がって追いつけない...と書くと付近は山深い森の中と思うかもしれないが、住宅街のど真ん中だった。お爺さんやおばあさんに追い抜かされ、上からは犬の散歩をしながらお母さんが降りてくる。多摩の住宅街と変わらぬ風景だった。ただ運動不足の白髪頭のお爺さんが息を切らせて慣れない坂道をあがっているだけであつた。しばらく進むと、大阪の街を一望できるところで谷川さんが待っていてくれた。谷川さんは「大丈夫ですか」などとは言わない。「良い眺めですよ」と絶妙な気遣いである。

公園の入り口からは山道が幾本もジグザグに走っていた。長野宏紀さんが2019年に発見して以来(長野・谷川2020)、谷川さんはここでキムラの分布がどのように拡大するかを調べている。この経緯は「谷川2021;東京蜘蛛談話会通信163号」に述べられているので興味ある方は参照願いたい。調査結果から言うとキムラの分布がそれ以前よりも広がったことはなかった。当然と言えば当然だが、記録することが大切だ。小一時間の調査を終えて生駒の山を下った。

額田駅から近鉄・JR・地下鉄を乗り継いで会場である長居駅へと着いた。大阪府立自然史博物館館内にあったはずの軽食処はコロナのせいか無くなっていた。仕方ないので、付近の飲食店で昼食を済ませた。13時から始まった例会は、初めに自己紹介ついで講演会だ。もっとも私が興味深かったのは、谷川さんによる「いま改めて神奈川のクモ」だった。友人ゆえに鼻負ではない。私は、この日までまったく彼の講演内容を聞いていなかった。事前に知らされたプログラムから演題は知っていた。おそらく今進行中の神奈川県のカモの採集談だろうと考えていた...それだけではなかった。

絶滅危惧種の選定の在り方を調査結果に基づき述べたもので、ともすれば希産種や移動力の少ない地中性のクモ類ばかりを選んでしまう傾向がある中で、絶滅危惧「環境」の指標となるクモは...という観点から考えてみたいという提案だった。たとえば、神奈川県ではクミサラグモの生息環境が危ないという。一方でカネコトタテグモは安定している。私の大した経験もない印象からも確かに肯ける。しかし反論もあろう。絶滅危惧種に対する考え方は環境省などからも明示されているが、クモ類をはじめ多くの認知度の低い分類群は「情報不足」の呪縛から逃れられずにいるような気がする。谷川さんは「各地の調査者の判断で良い」との立場で、相変わらず度量の広さを感じさせてくれるのだが、この提案が、私も含めた多くの皆さんの理解と賛同を得るまでにはかなりの時間がかかる気がする。

引用文献

- 谷川明男 2021. イソコモリ・キムラ 継続観察メモ. 東京蜘蛛談話会通信, 163: 3-4.
長野宏紀・谷川明男 2020. 大阪府におけるキムラグモの発見. Kishidaia, 116: 52-53.

出典の一覧

- (1) 洛北, 一乗寺あたり (東京蜘蛛談話会通信 140 号 2014 年 2 月)
- (2) 湯豆腐めぐり (東京蜘蛛談話会通信 143 号 2015 年 2 月)
- (3) 洛西山崎あたり (東京蜘蛛談話会通信 145 号 2015 年 10 月)
- (4) 立命館大学から御室仁和寺 (東京蜘蛛談話会通信 146 号 2016 年 1 月)
- (5) 醍醐寺の随心院 (東京蜘蛛談話会通信 147 号 2016 年 5 月)
- (6) 金福寺, 芭蕉案の紅葉 (東京蜘蛛談話会通信 150 号 2017 年 5 月)
- (7) 京都女子大への坂道 (東京蜘蛛談話会通信 152 号 2018 年 2 月)
- (8) トタテグモとあぶり餅 (東京蜘蛛談話会通信 154 号 2018 年 9 月)
- (9) 関東地方の希産種が... (東京蜘蛛談話会通信 157 号 2019 年 10 月)
- (10) ヒトエグモをひと目見たくて (東京蜘蛛談話会通信 158 号 2020 年 2 月)
- (11) 京都だより余譚 (キムラグモと関西クモ研究会例会) (書き下ろし)

(1) から (10) はほぼ原文のままだが, 一部加筆修正した.

日本蜘蛛学会第 54 回大会エクスカージョン採集報告

加藤 修朗

エクスカージョン会場（以下採集会と呼ぶ）は交通の便を考えて名古屋市内の平和公園（東山公園）とした。平和公園は名古屋市内にあり南北に 4 km と長く北から、へいわの森、くらしの森、ふれあいの森、いのちの森、うるおいの森と別れている。どの森を調査地とすべきか悩んだが採集予定日が 8 月であることから暑さを凌ぐ避難場所が必要と考え【里山の家】を拠点として【くらしの森】で実施することにした。

当日は幸運にも晴天で気温も思ったほど上昇せず採集日和となった。参加者には【くらしの森】の地図と最近採集されたクモの目録を配布し、注意事項を伝達して採集活動に入ってもらった。クモの採集が今回初めての方々は私（加藤）が引率をすることにした。私の班は 5 名程で人数的に説明しやすい適正な数であり通常の観察会の通り楽しく観察を進めることができ、私も異分野の方から興味深い話を聞いて有意義な時間を過ごすことができた。クモ合わせは昼食時と終了時に 2 回実施したがヒゴユウレイグモ幼体や県内初記録のムナアカナルコグモ成体雌が採集されたのは驚いた。両者とも探すつもりがないと見つからないクモであり、居るはずがないと思い込んで今まで時間を掛けて探していなかったのではと反省すべき点があった。

事後のことであるがヒゴユウレイグモ幼体を採集した松平氏に秋と春に成体確認のための再調査を実施すると約束をしたが、約束通り 10 月 23 日の調査で成体雌を採集したことを報告することができた。

8 月なので熱中症などの事故を心配したが無事に採集会を終えることができ安堵している。また名古屋市内の緑地帯なので種数は期待できないと思っていたが、想像以上の成果があがったのは嬉しい誤算であった。来年度の採集会もコロナの影響なく開催されることを切に希望する。

謝辞

エクスカージョンにご協力頂きました、新海栄一先生、熊田憲一先生に感謝申し上げます。

遠方よりお越しいただきました蜘蛛学会会員の皆様へご苦労さまでした。皆様の採集記録は勝手ながら名古屋市の生物実態調査の一部として利用させていただきます。

目録

目録の記載順序は谷川明男先生の日本産クモ類目録 ver.2022R1 に準拠した。

成長段階は、F: 雌成体, M: 雄成体, f: 雌幼体, m: 雄幼体, y: 性別不明幼体, N: 巣, E: 卵囊 を表す。

複数名で採集したので頭数は省く。

今回確認された成体は 13 科 54 種であった。

幼体のみ採集された種は文末に参考として記載した（幼体のみを含めると 23 科 93 種となる）。

調査場所：平和公園 ぐらしの森（愛知県名古屋市千種区東明町 7 丁目 25）

調査期間：2022 年 8 月 19 日 9：00～15：00

調査方法：シフティング及びビーティング

参加者（50 音順，敬称略）：上田悠史郎，大関佑弥，片山詔久，加藤修朗，熊田憲一，甲野涼，篠田源太，新海栄一，Kiyon Sorgog，長井聡道，中川恒，野口奨悟，萩野典子，平松毅久，藤田卓，糸井空有，本多佳子，山本フィリップ。

Halonoproctidae トタテグモ科

001 *Latouchia typica* (Kishida 1913)

キシノウエトタテグモ N

Segestriidae エンماغモ科

002 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Pholcidae ユウレイグモ科

003 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

004 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Theridiidae ヒメグモ科

005 *Argyrodes bonadea* (Karsch 1881)

シロカネイソウロウグモ F

006 *Chikunia albipes* (S.Saito 1935)

ギボシヒメグモ F

007 *Coleosoma blandum* O. P.-Cambridge 1882

サヤヒメグモ FM

008 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

009 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

010 *Episinus affinis* Bösenberg & Strand 1906

ヒシガタグモ F

011 *Episinus nubilus* Yaginuma 1960

ムラクモヒシガタグモ FMfm

012 *Neospintharus nipponicus* (Kumada 1990)

ツノナガイソウロウグモ F

013 *Parasteatoda culicivora* (Bösenberg & Strand 1906)

カグヤヒメグモ F

014 *Parasteatoda tabulata* (Levi 1980)

オオツリガネヒメグモ Mm

015 *Parasteatoda tepidariorum* (C. L. Koch 1841)

オオヒメグモ Fy

016 *Phoroncidia altiventris* Yoshida 1985

ハラダカツクネグモ F

017 *Phycosoma flavomarginatum* (Bösenberg & Strand 1906)

キベリミジグモ F

018 *Rhomphaea sagana* (Dönitz & Strand 1906)

ヤリグモ F

019 *Spheropistha melanosoma* Yaginuma 1957

クロマルイソウロウグモ FE

020 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

021 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Theridiosomatidae カラカラグモ科

022 *Wendilgarda ruficeps* Suzuki 2019

ムナアカナルコグモ F

023 *Zoma dibaiyin* Miller et al. 2009

シロオビカラカラグモ FyE

Mysmenidae コツブグモ科

024 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

025 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Araneidae コガネグモ科

026 *Acusilas coccineus* Simon 1895

ハツリグモ Ffm

027 *Aoaraneus pentagrammicus* (Karsch 1879)

アオオニグモ M

028 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

029 *Argiope minuta* Karsch 1879

コガタコガネグモ F

030 *Bijoaraneus komachi* Tanikawa, Yamasaki & Petcharad 2021

ビジョオニグモ M

031 *Cyclosa argenteoalba* Bösenberg & Strand 1906

ギンメッキゴミグモ Ffy

032 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

033 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

034 *Cyrtarachne akirai* Tanikawa 2013

オオトリノフンダマシ My

035 *Cyrtarachne bufo* (Bösenberg & Strand 1906)

トリノフンダマシ M

036 *Mangora herbeoides* (Bösenberg & Strand 1906)

ゴマジロオニグモ FM

037 *Neoscona mellottei* (Simon 1895)

ワキグロサツマノミダマシ M

038 *Neoscona scylloides* (Bösenberg & Strand 1906)

サツマノミダマシ Fy

039 *Trichonephila clavata* (L. Koch 1878)

ジョロウグモ Mfm

Mimetidae センショウグモ科

040 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Tetragnathidae アシナガグモ科

041 *Leucauge blanda* (L. Koch 1878)

チュウガタシロカネグモ F

042 *Leucauge celebesiana* (Walckenaer 1842)

オオシロカネグモ F

043 *Leucauge subblanda* Bösenberg & Strand 1906

コシロカネグモ F

044 *Leucauge subgemmea* Bösenberg & Strand 1906

キララシロカネグモ Ffm

045 *Meta nigridorsalis* Tanikawa 1994

チビクロドヨウグモ Ff

046 *Tetragnatha keyserlingi* Simon 1890

ヤサガタアシナガグモ Mf

047 *Tetragnatha praedonia* L. Koch 1878

アシナガグモ F

048 *Tetragnatha squamata* Karsch 1879

ウロコアシナガグモ FM

049 *Zhinu reticuloides* (Yaginuma 1958)

ヤマジドヨウグモ FM

Linyphiidae サラグモ科

050 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

051 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

052 *Neriere longipedella* (Bösenberg & Strand 1906)

アシナガサラグモ Fm

Uloboridae ウズグモ科

053 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

054 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Agelenidae タナグモ科

055 *Agelena silvatica* Oliger 1983

クサグモ F

056 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Oxyopidae ササグモ科

057 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Pisauridae キシダグモ科

058 *Dolomedes sulfureus* L. Koch 1878

イオウイロハシリグモ Fy

Lycosidae コモリグモ科

059 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

060 *Pardosa agraria* Tanaka 1985

イナダハリゲコモリグモ F

061 *Pardosa astrigera* L. Koch 1878

ウツキコモリグモ FMy

062 *Pardosa brevivulva* Tanaka 1975

ヤマハリゲコモリグモ M

063 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Thomisidae カニグモ科

064 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

065 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

066 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

067 *Thomisus labefactus* Karsch 1881

アズチグモ MF

068 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

069 *Xysticus saganus* Bösenberg & Strand 1906

ゾウシキカニグモ FM

Trachelidae ネコグモ科

070 *Orthobula crucifera* Bösenberg & Strand 1906

オトヒメグモ M

Phrurolithidae ウラシマグモ科

071 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Gnaphosidae ワシグモ科

072 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Miturgidae ツチフクログモ科

073 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Cheiracanthidae コマチグモ科

074 *Cheiracanthium eutittha* Bösenberg & Strand 1906

アシナガコマチグモ F

075 *Cheiracanthium lascivum* Karsch 1879

ヤマトコマチグモ F

Philodromidae エビグモ科

- 076 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
077 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
078 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

Salticidae ハエトリグモ科

- 079 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
080 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
081 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
082 *Mendoza canestrinii* (Ninni 1868) オスクロハエトリ FM
083 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
084 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
085 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
086 *Myrmarachne inermichelis* Bösenberg & Strand 1906 ヤサアリグモ F
087 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
088 →▲幼体のみで記録した種▲を参照
089 *Phintella abnormis* (Bösenberg & Strand 1906) チャイロアサヒハエトリ F
090 *Phintella bifurcilinea* (Bösenberg & Strand 1906) キアシハエトリ Ffy
091 *Plexippoides doenitzi* (Karsch 1879) デーニッツハエトリ Fm
092 *Plexippus setipes* Karsch 1879 ミスジハエトリ FMy
093 →▲幼体のみで記録した種▲を参照

▲幼体のみ記録した種▲

- y02 *Ariadna lateralis* Karsch 1881 ミヤグモ y
y03 *Pholcus crypticolens* Bösenberg & Strand 1906 ユウレイグモ y
y04 *Pholcus higoensis* Irie & Ono 2008 ヒゴユウレイグモ y
y08 *Meotipa argyrodiformis* (Yaginuma 1952) オダカグモ f
y09 *Meotipa vesiculosa* (Simon 1895) ヒシガタヒメグモ m
y20 *Steatoda cingulata* (Thorell 1890) ハンゲツオスナキグモ y
y21 *Yaginumena mutilata* (Bösenberg & Strand 1906) コアカクロミジグモ y
y24 *Microdipoena ogatai* (Ono 2007) ヤマトコツブグモ y
y25 *Microdipoena pseudojobi* (Lin & Li 2008) ナンブコツブグモ y
y28 *Argiope bruennichi* (Scopoli 1772) ナガコガネグモ f
y32 *Cyclosa japonica* Bösenberg & Strand 1906 ヤマトゴミグモ y
y33 *Cyclosa octotuberculata* Karsch 1879 ゴミグモ fy
y40 *Mimetus testaceus* Yaginuma 1960 オオセンショウグモ f
y50 *Diplocephaloides saganus* (Bösenberg & Strand 1906) ハラジロムナキグモ f
y51 *Ketambea nigripectoris* (Oi 1960) ムネグロサラグモ y
y53 *Hyptiotes affinis* Bösenberg & Strand 1906 オウギグモ f
y54 *Miagrammopes orientalis* Bösenberg & Strand 1906 マネキグモ f
y56 *Allagelena opulenta* (L. Koch 1878) コクサグモ fm
y57 *Oxyopes sertatus* L. Koch 1878 ササグモ y
y59 *Hygrolycosa umidicola* Tanaka 1978 シッチコモリグモ y

y63 <i>Pardosa pseudoannulata</i> (Bösenberg & Strand 1906)	キクヅキコモリグモ	fy
y64 <i>Ebelingia kumadai</i> (Ono 1985)	クマダハナグモ	f
y65 <i>Ebrechtella tricuspidata</i> (Fabricius 1775)	ハナグモ	fy
y66 <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch 1878	ワカバグモ	f
y68 <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer 1802)	トラフカニグモ	y
y71 <i>Otacilia komurai</i> (Yaginuma 1952)	コムラウラシマグモ	y
y73 <i>Prochora praticola</i> (Bösenberg & Strand 1906)	イタチグモ	y
y76 <i>Philodromus spinatarsis</i> Simon 1895	キハダエビグモ	y
y77 <i>Thanatus miniaceus</i> Simon 1880	ヤドカリグモ	f
y78 <i>Tibellus japonicus</i> Efimik 1999	シャコグモ	fy
y79 <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille 1819)	ネコハエトリ	y
y80 <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch 1878)	マミジロハエトリ	f
y81 <i>Marpissa pulla</i> (Karsch 1879)	ヨダンハエトリ	y
y83 <i>Menemerus brachygnathus</i> (Thorell 1877)	シラヒゲハエトリ	fm
y84 <i>Myrmarachne elongata</i> Szombathy 1915	ヤガタアリグモ	f
y85 <i>Myrmarachne formicaria</i> (De Geer 1778)	タイリクアリグモ	f
y87 <i>Orienticius vulpes</i> (Grube 1861)	イナズマハエトリ	f
y88 <i>Pancorius crassipes</i> (Karsch 1881)	アシプトハエトリ	y
y93 <i>Siler cupreus</i> Simon 1889	アオオビハエトリ	y

以上

付記：本稿は、中部蜘蛛懇談会会報「蜘蛛，No. 55」に掲載予定のものですが、著者である加藤修朗さんのご厚意で、本誌にもご提供いただきました。加藤さんと中部蜘蛛懇談会に厚くお礼申し上げます。（編集委員会）

関西クモ研究会 2022 年度 採集会の記録

実施日：2022 年 10 月 9 日

場所：兵庫県神戸市摩耶山

参加者：赤松史憲，片山元気，加村隆英，北川憲一，清水裕行，関根幹夫，中村香代子，西川喜朗，西本裕，原口岳，松下紫，村上協三，吉田徹也。

(事務局でお名前を把握できていない方がいらっしゃいます。不手際をお詫びいたします。)



図 1. 採集会の参加者.

今回の採集会で確認されたクモは以下のとおりである。採集者が特定できる場合は括弧内にその姓を示した。同定は，加村隆英，清水裕行，関根幹夫，西川喜朗，原口岳（50 音順）が行った。一部の種の同定については，谷川明男氏のご教示を得た。厚くお礼申し上げる。

ジグモ科

Atypus karschi Dönitz 1887 ジグモ 住居巢を確認（原口）（図 2）

エンマグモ科

Ariadna lateralis Karsch 1881 ミヤグモ（？）住居巢のみを確認。クモは未確認。（図 3）

ヒメグモ科

Dipoena punctisparsa Yaginuma 1967 シモフリミジグモ ♀幼・♂幼（片山）

Enoplognatha abrupta (Karsch 1879) カレハヒメグモ 幼

Parasteatoda tepidariorum (C. L. Koch 1841) オオヒメグモ 幼 (原口)

Phycosoma mustelinum (Simon 1889) カニミジグモ ♀幼 (片山)

Stemmops nipponicus Yaginuma 1969 スネグロオチバヒメグモ ♂幼・幼 (加村); ♀幼・♂幼 (西川); ♂幼 (片山)

Platnickina sp. ♂幼 (片山)

コガネグモ科

Aoaraneus pentagrammicus (Karsch 1879) アオオニグモ 幼

Araniella sp. ムツボシオニグモ (?) 幼

Cyclosa argenteoalba Bösenberg & Strand 1906 ギンメッキゴミグモ ♀ (加村) 幼

Cyclosa octotuberculata Karsch 1879 ゴミグモ ♀幼 (片山) 幼

Trichonephila clavata (L. Koch 1878) ジョロウグモ ♀

アシナガグモ科

Tetragnatha sp. ウロコアシナガグモ (?) ♀幼 (関根)

サラグモ科

Neriere sp. シロブチサラグモ または コシロブチサラグモ ♀幼 (原口)

Neriere sp. ムネグロサラグモ または クスミサラグモ 幼 (原口)

ホウシグモ科

Asceua japonica (Bösenberg & Strand 1906) ドウシグモ ♀ (清水)

タナグモ科

Coelotes (s. lat.) sp. ヤチグモ類の一種 幼 (加村)

ナミハグモ科

Cybaeus sp. ナミハグモ属の一種 幼 (西川)

コモリグモ科

Pardosa astrigera L. Koch 1878 ウヅキコモリグモ ♀ (加村); ♀ (関根); ♀幼 (清水); 幼 (原口)

Pardosa sp. ハリゲコモリグモ類の一種 幼 (加村)

カニグモ科

Bassaniana decorata (Karsch 1879) キハダカニグモ 幼 (原口)

Ebelingia kumadai (Ono 1985) クマダハナグモ ♀幼 (片山)

Lysiteles coronatus (Grube 1861) アマギエビスグモ ♀幼・♂幼 (加村); ♀幼・幼 (関根); ♀幼 (片山); ♀幼 (清水)

Oxytate striatipes L. Koch 1878 ワカバグモ 幼

フクログモ科

Clubiona sp. 幼 (原口)

ネコグモ科

Trachelas japonicus Bösenberg & Strand 1906 ネコグモ ♀幼 (加村)

ワシグモ科

Gnaphosa sp. 幼 (西川)

ツチフクログモ科

Prochora praticola (Bösenberg & Strand 1906) イタチグモ ♀幼 (片山) ; 幼 (西川)

エビグモ科

Philodromus subaureolus Bösenberg & Strand 1906 アサヒエビグモ 幼

Philodromus spinatarsis Simon 1895 キハダエビグモ ♀幼・♂幼 (清水) ; 幼

ハエトリグモ科

Carrhotus xanthogramma (Latreille 1819) ネコハエトリ 幼 (加村)

Evarcha albaria (L. Koch 1878) マミジロハエトリ ♀幼 (関根) ; ♀幼 (原口)



図 2 (左), ジグモの営巣状況 ; 図 3 (右), ミヤグモの住居巣と思われるもの. (撮影者はいずれも原口岳.)

特筆すべき種

ドウシグモ : 今回, 1♀が採集された. 本種は, 京都府レッドデータブック 2015 では「絶滅危惧種」, 大阪府レッドリストでは「情報不足」として掲載されている. 新海ら (2022) によると, 本種の兵庫県内における現在までの明瞭な記録は 2 件だけ [いずれも宝塚市玉瀬 (清水 2004, 2005)] であった.

文献

大阪府レッドリスト. <https://www.pref.osaka.lg.jp/midori/tayouseipartner/redlist.html>

京都府レッドデータブック 2015. <https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/index.html>

清水裕行 2004. 第 1 回武田尾採集会報告. くものいと, 36: 12–20.

清水裕行 2005. 第 2 回武田尾採集会報告. くものいと, 38: 23–28.

新海明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生 2022. CD 日本のクモ ver.2022. 著者自刊.

(文責 : 加村隆英・原口岳)

関西クモ研究会 2022 年度例会の記録

2023 年 1 月 21 日（土）に大阪市立自然史博物館で 2022 年度の例会が開催された。通常の会場における実施に加えて、オンライン（zoom を使用）による参加も併用された。

役員会

出席者：加村隆英（会長・編集），原口岳（庶務・編集），吉田真（会計），船曳和代（顧問），関根幹夫（会計監査），榊元智子（オブザーバー），荒川真（オブザーバー，オンライン参加）。

以下の事項が審議，報告された。

(1) 会費納入状況について

会計幹事から，会費の未納者が多いことが報告された。検討の結果，2020 年度以前の会費を未納の者に督促状を送付することとする。

(2) 次期（2023・2024 年度）の役員候補

次のとおり，候補者を選定した。

会長：加村隆英，庶務幹事：原口岳，会計幹事：荒川真，編集委員：加村隆英・原口岳，顧問：西川喜朗・吉田真，会計監査：榊元智子。

(3) 会計幹事交代に関して

会計幹事の交代に当たって，それを銀行に届け出る際に次の 2 点が必要となる。① 会則の改定（現行の会則には会の所在地の記載がないため，これを記した条項を加える），② 役員名簿の作成。また，現在まで，銀行への届け印として個人の認印を使用していたが，今後の便宜を考慮し，本会の角印を作製することとする。

(4) 「くものいと」の編集状況。

2023 年 3 月に第 56 号を発行予定。

(5) 2023 年度の行事予定

- ・採集会 2023 年 5～6 月及び 9～10 月に実施予定。場所は未定（2022 年秋と同じく，兵庫県神戸市摩耶山を候補として検討する）。
- ・例会 2023 年 12 月または 2024 年 1 月に実施予定。

例会

出席者

会場参加：加村隆英，川合あき，清水裕行，新海明，関根幹夫，谷川明男，西本裕，原口岳，船曳和代，榊元智子，松下紫，松本吏樹郎，村上協三，吉田真。

オンライン参加：荒川真，大関佑弥，岡田純二，加藤修朗，塩崎哲哉，荘司康治郎，中村香代子，芳田宗大，芳田尚子，吉田徹也。

最初に参加者の自己紹介と近況報告が行われ，続いて以下の講演が行われた。

講演発表

- (1) 谷川明男：いま改めて神奈川県のカモ
- (2) 吉田真：最近採集したよく分からないカモ
- (3) 加村隆英：コムラウラシマグモの交接の観察
- (4) 西本裕：ヒゲカモバチ *Dipogon* 属（ハチ目・カモバチ科）が狩るえさのカモについて
- (5) 新海明：網構造と造網行動から見た円網多様化に関する仮説（その2）
- (6) 松本吏樹郎：ツリガネヒメグモ属を寄主とする *Zatypota* 属 3 種の複雑な寄主利用（Hymenoptera, Ichneumonidae, *Polysphincta* group）
- (7) 荘司康治郎：日本のコモリグモ四選 + α [オンライン]
- (8) 塩崎哲哉：ヤマトホラヒメグモの交接の観察 [オンライン]

総会

役員会で審議・報告された内容が会員に報告された。次期役員候補者及び会則の改定について、役員会で審議された内容が提案され、審議の結果、承認された。

関西クモ研究会 2021 年度会計報告

収入

2020 年度からの繰越金	715,561
会費 2021 年度前受け分繰り入れ	43,000
会費 2021 年度分入金	13,000
会費過年度分入金	9,000
受取利子	6

合計	780,567
-----------	----------------

支出

2021 年度例会 連絡はがき発送	5,733
くものいと No. 55 印刷費	51,071
くものいと No. 55 発送用封筒	1,114
くものいと No. 55 郵送料	16,380
送金手数料	100
2022 年度への繰り越し	706,169

合計	780,567
-----------	----------------

会費前受け状況

2021 年度末における会費前受け分の合計は、70,000 円である。その内訳は次のとおり。2022 年度分 38,000 円；2023 年度分 14,000 円；2024 年度分 8,000 円；2025 年度分 5,000 円、2026 年度分 2,000 円；2027 年度分 1,000 円；2028 年度分 1,000 円；2029 年度分 1,000 円。

上記のとおり、報告します。

会計幹事 吉田真

2021 年度会計監査報告

関西クモ研究会 2021 年度会計について、関係諸票書類に基づき監査を行った結果、適正に処理されていることを確認しましたことを報告いたします。

2022 年 5 月 5 日 会計監査 関根幹夫

関西クモ研究会会則

2000年12月10日制定
2023年1月21日一部改定

第1章 名称

第1条 本会は、関西クモ研究会と称する。

第2章 所在地

第2条 本会の所在地は会計幹事の住所におく。

第3章 目的

第3条 本会は、関西地域を中心に、クモ類研究の進歩と普及を図ることを目的とする。

第4章 事業

第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会誌「くものいと」の刊行。
- (2) 例会の開催。
- (3) 採集・観察会の開催。
- (4) その他、本会の目的に合致した事業。
- (5) (2), (3) については会員以外の者も参加することができる。

第5章 会員

第5条 本会の会員は、本会の目的に賛同する個人とする。

第6条 入会を希望する者は、本会庶務幹事に申し出たうえで、当該年度の会費の納入をもって会員として登録される。

第7条 会員は次の場合、その資格を失う。

- (1) 退会する意思を本会庶務幹事に届け出た場合。
- (2) 会費を2年間にわたって滞納した場合。

第8条 会員は、次の権利を有する。

- (1) 会誌の配付を受けること。
- (2) 会誌に投稿すること。
- (3) 例会及び採集・観察会などに参加すること。
- (4) 例会などにおいて、研究発表及び講演を行うこと。
- (5) 本会の運営及び事業に関して、意見を述べること。

第6章 役員

第9条 本会に、次の役員をおく。

会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、編集委員3名、顧問若干名、会計監査1名。

第10条 役員任期は2年とする。ただし、顧問については、任期を設けない。また、役員相互兼務は原則として認めない。

第11条 役員選出は、会員の互選によるものとする。

第12条 役員職務は、次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- (2) 庶務幹事は、会員の入会・退会に関する業務、会員名簿の管理、例会及び採集・観察会の開催に関する会員への連絡業務などを行う。
- (3) 会計幹事は、会費の受け入れとその管理、諸費用の支払いなどの業務を行う。
- (4) 編集委員は、会誌の編集及び発送の業務を行う。
- (5) 顧問は、本会の運営に関する助言を行う。
- (6) 会計監査は、本会の会計を監査する。

第7章 機関

第13条 本会に、次の機関をおく。

総会、評議会、編集委員会。

第14条 総会は、本会の最高議決機関である。会長は、年1回例会時にこれを招集し、出席会員をもって構成する。

第15条 評議会は、会長、庶務幹事、会計幹事、編集委員、顧問によって構成され、会長が招集する。評議会は、本会の運営に関する事項を審議・決定し、必要な事項に関しては総会に提案する。

第16条 編集委員会は、編集委員によって構成され、会誌の編集・刊行に関する事項を審議・決定し、また、会誌の編集・刊行に関する業務を行う。

第8章 会計

第17条 本会の経費は、会費、その他の収入をもってあてる。会費は年額1,000円とする。会費を2年間滞納した者には会誌の発送を停止する。

第18条 本会の会計年度は4月1日から翌年の3月31日までとする。

第9章 会則の改正

第19条 本会則の改正には、総会における出席会員の3分の2以上の賛成を必要とする。

関西クモ研究会 会費納入のお願い

本会の年会費は年額 1,000 円です。

2023 年 4 月から、会計幹事の交代に伴い、入金先が変わります。

新しい入金先は次のとおりです。お間違えのないよう、お願いいたします。

郵便振替口座 口座記号・番号 00990-6-240315
加入者名 関西クモ研究会

他金融機関からの振込用口座番号

〇九九（ゼロキュウキュウ）店（099） 当座 0240315

会費納入に関するお問い合わせは、会計幹事の荒川までお願いいたします。

会計幹事：荒川 真 E-mail: arkw0arachnids@gmail.com

編集後記

今年 1 月に 2022 年度の例会を開催した時点では、本誌の原稿は 3 編しか集まっておらず、このままでは第 56 号は、20 ページにも満たない薄っぺらいものになってしまうのでは、と心配していました。しかし、その後、原稿が寄せられて、何とか 40 ページを超えることができました。投稿してくださった方々に感謝いたします。

今回の編集作業においては、鶴崎展巨氏のご協力を得ました。厚くお礼申し上げます。

関西クモ研究会

2021–2022 年度

会 長 加村隆英
庶務幹事 原口 岳
会計幹事 吉田 真
編集委員 加村隆英・原口 岳
会計監査 関根幹夫
顧 問 西川喜朗・船曳和代

2023–2024 年度

会 長 加村隆英 E-mail: kamura@haruka.otemon.ac.jp
庶務幹事 原口 岳 E-mail: h1r1g3ch2@gmail.com
会計幹事 荒川 真 E-mail: arkw0arachnids@gmail.com
編集委員 加村隆英・原口 岳
会計監査 榊元智子
顧 問 西川喜朗・吉田 真

ウェブサイト http://kansaikumo.sakura.ne.jp/kansaikumo/index_kansaikumo.html

くものいと 第 56 号
2023 年 3 月 31 日 発行
関西クモ研究会

印刷 株式会社オーエム